筑波大学新聞

第340号
編集責任
筑波大学新聞
編集代表
福原直樹
TEL・FAX 029(853)6699
E-mail shinbun@un.tsukuba.ac.jp
月刊

発行所
筑波大学
茨城県つくば市
天王台1－1－1

渡り廊下の屋根崩落

重さ13トン けが人はなし

12月10日午前7時45分ごろ、第一エリアの1B棟と1C棟をつなぐ渡り廊下の屋根が崩落した。当時、現場には誰もおらず、けが人はいなかった。施設部などは、学外の専門家を交え原因を調べている。崩落を受け大学側は学内の緊急調査を実施。平砂学生宿舎と医学エリアの計3カ所の渡り廊下についても「安全性に問題がある」として通行禁止にした。1月18日時点でもこの状況が続いている。（木村誠＝人文学類1年、秋田耕平＝社会学類2年、3面に関連特集、4面に記者の声、11面に関連記事）

1C棟側（左）が崩落した渡り廊下の屋根（12月10日、第一エリアで）＝木村誠撮影

施設はいま

施設部によると、崩落した屋根は1975年の1B棟、1C棟建設と同時に設置され、重さ約13トン、面積約60平方メートル。長短2つの長方形の屋根が両棟の形に合わせてつながっており、長い方が約17メートル、短い方が約10メートルだという。

同部によると、2015年の建築基準法に基づく目視点検では、異常は見られなかったという。

屋根の崩落は第一エリア警備員室の警備員が発見。大学側は同日中にこの屋根のある渡り廊下と、その下の1階部分を通行禁止にした。屋根はその後撤去され、12月20日午前9時ごろ、通行できるようになった。

この崩落を受けて施設部は12月12日、筑波キャンパス内の連絡通路や渡り廊下など全77カ所を目視で緊急調査。その結果、平砂学生宿舎の8号棟と9号棟、10号棟と11号棟、医学エリアの4B棟と4C棟をつなぐ渡り廊下の計3カ所で「安全性に問題がある」として12月18日、周辺を含めて通行禁止とした。

3カ所 通行禁止

筑波大学は現在、石野利和副学長（財務・施設担当）や玉川信一副学長（学生担当）などを含めた対策部会を組織、学内外の専門家らと崩落の原因を調べている。また、12月12日に緊急調査をした渡り廊下などについても、今後、外部業者に詳しい点検を委託する方針だ。

施設企画課の三好毅（たけし）課長は「学生の安全に関わる重大な事故。原因などの情報は速やかに公表したい」と話している。

◆

崩落翌日の12月11日は通常通りに授業が行われた。同日、1B棟、1C棟では午前中の1、2限は総合科目など計7科目の授業があり、約400人が履修していた。だが大学からは崩落に関連し、授業の有無などを伝える掲示や連絡などはなかった。

当日1C棟で授業があった男子学生（社学2年）は「SNSなどで（崩落が）話題になっていたが、大学から何の知らせもなく不安だった」と話した。

本紙は今回の渡り廊下の屋根の崩落に関連し、12月10、11、20日に計3回、本紙ツイッターとフェイスブックで速報を配信した。

◆

「施設はいま」では、大学内の施設や定期点検の現状や問題点などを検証します。

撮影・中村瑞歩＝日本語・日本文化学類1年

つくば歳時記

12月16日のつくばセンター広場。手製ランタンが幻想的な年の瀬を描いた。（2面に関連記事）

体芸食堂・名店街和食店 撤退へ

利用者減で赤字続く

第三エリア名店街の和食店と体育・芸術エリアの体芸食堂を運営する業者が、両食堂の経営難のため今年度で撤退することが、学生生活課などへの取材で分かった。現在同課は跡地に入る別な業者を探している。また、体芸食堂が入る体育・芸術福利厚生棟は、平成29年度の補正予算が成立した場合、耐震改修工事を始める予定で、工事が決まった場合、同食堂は来年度休業となる。

（越智小夏＝比較文化学類2年、木村誠）

業者は8年度から第三エリア名店街の和食店を運営しており、筑波大学側からの打診を受け、23年度から体芸食堂の運営を始めた。業者によると、運営当初の一日当たりの利用者数は、和食店は約200～300人、体芸食堂は約30人だった。だが、5年ほど前から和食店の利用者が減り始め、現在は一日当たり約150人にまで減少した。赤字が続いていたことや、人員の確保が困難になったことから、来年度以降の契約を見送り、撤退を決めたという。

第三エリア名店街の和食店の跡地には、留学生などからの要望を受け、ハラール食＝や、ベジタリアン対応ができる業者を募集する予定。現在筑波大でハラール食を提供しているのは、第三エリアの「カフェ マルハバン」の1店舗で、ムスリム（イスラム教徒）の学生などから「混んでいて昼休みの間に食事ができず、授業に支障が出る」といった意見が学生生活課などに寄せられていた。

体芸食堂が入る体育・芸術福利厚生棟（1月14日、体育・芸術エリアで）＝木村誠撮影

体芸食堂が入る体育・芸術福利厚生棟は、29年度補正予算に盛り込まれており、国会で可決・成立すれば工事が行われる見通しだ。同棟は築44年が経過し、老朽化が進んでいるほか、文部科学省が定めている教育施設の耐震基準を大幅に下回っている。

厚生棟は改修予定

業者の担当者は「撤退は残念だが、慈善事業ではないため仕方がない」と話した。

体芸食堂を頻繁に利用するという学生（比文1年）は「カレーが好きでよく利用していたので撤退は名残惜しい」と話した。

ハラール食＝「シャリーア」と呼ばれるイスラム教徒が守る法で食べることが許されている、食材や料理。

注目記事

アリーナ 候補地決定 2
大谷 渡米で二刀流は？ 4
吹奏楽団 定期演奏会 5
梶原選手 インタビュー 8

集団の中で位置取りをする梶原選手

バレー 天皇杯8強 9
学生宿舎 改善進む 10

ミニ特集 3
大規模改修は補助金頼み
施設の現状と課題

特集 6,7
卒業後の活躍に期待
旅立つアスリート

筑波おろし

取材を続けてきて思うのは、学芸の記事の難しさだ。以前、ある芸術家を取材した時のこと。その芸術の解釈を書こうとしたところ、「芸術には答えがない。見る人がそれぞれ好きなことを感じ取ってくれればよい」と言われた▼確かに、芸術は受け手の数だけ捉え方がある。そしてそこには「正解」はない。だが記者が記事を書き、そして、それがいったん印刷されると、その解釈があたかも、唯一無二の答えのようになってしまう。芸術家の記事を書く時、頭を抱えた▼高校まで、我々は何事にも答えが一つしかないと教えられてきたような気がする。だが大学に入り、この世の「正解」は無数にあると思うようになった。価値観や生き方。思想。そして人物に対する評価……。いずれも「正解」は限りなくある▼ドイツの思想家ニーチェは、「世界には、きみ以外には誰も進むことのできない唯一の道がある。その道はどこに行き着くのか、と問うてはならない」と書いた。人間は自分の生き様を選べるからこそ、世界でたった一人の自分になれる。無論、その行先は無数にある▼記事を書く上でも同じことを思う。自分勝手な解釈は、どこかで誰かを既成の型にはめる。多様な考え、生き様がある社会の中で、それらを反映するような記事を書きたいと思う。思想家ニーチェはこう続ける。「ひたすら進め」と。

大学新聞コンテスト

本紙「宿舎を問う」が連載賞

その年の優秀な大学新聞を決める「第7回大学新聞コンテスト」（関東学生新聞連盟・東京五大学新聞連盟主催、朝日新聞社・日刊スポーツ新聞社特別後援）の一般新聞部門で、本紙のキャンペーン「宿舎を問う」が連載賞に選ばれ、表彰式が12月19日に朝日新聞東京本社（東京都中央区）で行われた。総合評価の最高は東京大学新聞で、本紙は総合2位だった。（本紙編集部＝2面に関連記事）

コンテストには連載賞と記事賞のほか、これらの評価の総合で決まる「朝日新聞社賞」がある。

「宿舎を問う」は、筑波大学の学生宿舎の部屋面積が、大学の公式案内に記載の「約10平方メートル」より狭いことを報じた特集を機に2015年4月（320号）に開始。不法投棄問題や、昨年4月から運用を開始し、日本人学生と留学生が5人一組で同居する「グローバルヴィレッジ」に留学生の入居者が少ない問題などを取り上げてきた。

同コンテスト審査員の山口進・朝日新聞文化くらし報道部長は「宿舎を問う」について「学生活に近い問題を継続的に報じている」と受賞理由を語った。

記事賞は熊本県のPRキャラクター「くまモン」の生みの親である小山薫堂さんに取材した慶應塾生新聞の記事が選ばれた。筑波大の教員人件費に関する本紙記事（334号、昨年4月）は4位だった。

「朝日新聞社賞」は記事賞と連載賞がともに2位の東京大学新聞に贈られた。

東京理科大学新聞会提供

表彰される小宮山瑛生・前編集長（右）（12月19日、朝日新聞本社で）

訂正とおわび

339号1面の相馬崇史選手（体専1年）の箱根駅伝出走内定の記事中の、「2004年に当時の日本学連選抜チームとして往路5区で出場した鐘ケ江幸治選手（平成15年度工学システム学類卒）以来の快挙」は、正しくは「2007年に当時の関東学連選抜チームとして往路4区で出場した大城将範（まさのり）選手（平成21年度リスク工学専攻修了）以来の快挙」でした。おわびして訂正いたします。

アリーナ候補地決まる

現職員宿舎に 2020 年の完成目指す

筑波大学は12月21日、建設を検討中のスポーツや音楽などのイベントを行う「アリーナ」の設置候補地を、現在、大学職員宿舎があるつくば市吾妻2-F自の敷地に決定したと発表した。つくば駅から徒歩5分という利便性の良さなどが決め手となったが、同駅周辺では商業施設の閉店が相次いでおり、筑波大はつくば市と連携し、同駅周辺の活性化も図る考えだ。アリーナは2020年の完成を目指す。

（明石品之＝体育専門学群2年、写真も）

アリーナ候補地に決まった吾妻２丁目職員宿舎（1月11日、つくば市吾妻で）

候補地は敷地面積約3万3000平方㍍。筑波大中央体育館の約6個分の広さで、筑波大は同地に7～8000人収容のアリーナと数百台分の駐車場を整備する方針だ。

アリーナの建設と運営は、大学と民間企業が出資して新設する特定目的会社（SPC）などが行う方針で、筑波大は同社に敷地を貸し出す形をとる。今月中にはコンサルタント事業者と契約し、具体的な事業計画や収益の見込みなどを検討する。

同地区の職員宿舎には現在、127世帯が住んでおり、年内までに別の宿舎などへ移転を促す。

アリーナでは入学式などの学内行事のほか、大学バスケットボールやプロバスケットボールの試合、芸術公演なども行う予定。周辺には飲食店などの商業施設の設置計画もある。永田恭介学長は「週末に小さなお祭りができるような施設を目指したい」と語った。

つくば駅とアリーナ候補地周辺の地図

記者の目

候補地 周囲へ配慮を

海外ではアリーナの建設や運営が市街地の再開発や活性化を成功させた事例がいくつもある。つくば駅周辺では、昨年2月に西武筑波店が閉店したほか、イオンつくば駅前店など商業施設の閉店も決まった。アリーナ建設が駅前の再開発の足がかりとなることを期待したい。

だが実際に候補地を歩いてみると、気になる点もある。候補地周辺には住宅街や市立中央図書館、つくば美術館などがあり、イベント による騒音などが周辺環境に影響を与える可能性も排除できない。

また、アリーナの維持管理の費用は一般的に、建設などの初期投資費用より高いと言われている。事業計画を綿密に立ててほしいと思う。

（明石尚之）

クレオ全店舗閉店へ

市議会　再開発求める

1月末閉店

つくば駅前にある商業ビル「CREO（クレオ）」（つくば市吾妻）の全店舗が1月末に閉店することが、同ビルを管理する筑波都市整備（同市竹園）などへの取材で分かった。昨年2月には、同ビルに入居していた西武筑波店が閉店している。これに関連し、つくば市議会は12月、つくば駅前の活性化のため、税金の投入も含めた施策をつくば市に求める決議を可決した。（森賀遼太＝社会学類1年、写真も）

同ビルは7階建て、現在、1階と2階に「イオンつくば駅前店」の撤退でビルの大部分が空くことから、2階に書籍や眼鏡、衣服などを販売する「クレオ専門店」8店舗が残る。だが、11月に「イオンつくば駅前店」が売り上げ減少などを理由に閉店を発表。同ビルを管理する筑波都市整備は、「イオンつくば駅前店」の撤退でビルの大部分が空くことから、建物全体の警備や空調の維持が難しいと判断し、「クレオ専門店」全8店舗の閉店も決めた。

同ビルの1、2階の一部と3～7階には昨年9月まで西武筑波店が入居していたが、その後の活用方法は決まっていない。

8店舗の今後について同社の担当者は「別の場所への移転を視野に、各店舗と協議をしている」と話している。すでに着物販売店の「さが美」（本社・神奈川県平塚市）と書店の「LIBRO（リブロ）」（本社・東京都豊島区）の2店舗が、同社が管理し、同ビルに隣接する商業施設「Q't（キュート）」（つくば市吾妻）への移転を決めている。

これに関連し、つくば市議会は12月15日、「つくば中心市街地の魅力あるまちづくりのための施策を講じることを求める」決議を可決した。同決議は同ビルの閉店やそれに伴うつくば駅前の中心市街地の空洞化を懸念。つくば市に公共施設の整備など税金の投入を含めた施策を求めており、同市も駅前の再開発に乗り出す方針だ。

今年１月末に閉店が決まったクレオ（1月15日、つくば市吾妻で）

山岳科学センター菅平高原実験所

「大明神寮」有形文化財に

筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所（長野県上田市）にある「大明神寮」が、今年度中にも国の登録有形文化財に登録される見込みとなった。築50年以上の木造建築としての価値などが評価されたもので、文化庁の文化審議会が昨年11月、登録を文部科学大臣に答申した。

同寮は、1965年10月に学生の研究や野外実習のための宿舎として建設され、同実験所内にある「大明神の滝」などにちなんで名づけられた。現在は、同実験所主催の自然観察会で動植物の紹介をする「自然ガイド」の養成講座などで利用されている。

登録では、古い木造建築であることに加え、同高原の象徴である根子岳（ねっこだけ）と四阿山（あずまやさん）との一体感のある景観や、さまざまな合宿や研究、研修に利用され、同高原の歴史を伝える建物としての価値も評価された。

同実験所事務係長の樫山茂樹さんは「学生や地域住民の皆さんが動植物の観察や学習をしながら、周辺の景色を眺め、くつろげる憩いの場として発展していきたい」と話した。（池田花於里＝比較文化学類1年）

登録有形文化財へ登録する見込みの「大明神寮」（2012年５月４日、同実験所で）＝同実験所提供

大学新聞コンテスト

継続的な取材に評価

不法投棄の実態 明らかに

【1面参照】第7回大学新聞コンテストで連載賞を受賞した「宿舎を問う」は、2015年4月号（3320号）で筑波大学の学生宿舎問題を取り上げた特集を機に始まった。特集では、居室の狭さや居住環境の悪さを指摘。大学の公式パンフレットに記載されていた、居室面積「10平方㍍」を大きく下回る部屋も存在することを、実際に複数の居室を調査して明らかにした。

連載した「宿舎を問う」（1月16日、筑波大学新聞編集室で）＝明石尚之撮影

その後は不法投棄問題を中心に宿舎をめぐる問題を何度も取り上げてきた。

15年10月号（3353号）では、粗大ゴミが不法投棄されている現場を山野辺拓実記者（社学4年）がルポタージュ。不法投棄現場に放置されてカビが生えたマットレスや、小バエが舞う様子のほか、明らかに学外者と思われる中年男性がマットレスを不法投棄する様子、また男性が記者の問いかけに応じず立ち去ったことを詳報した。

16年10月号（3330号）では、過去5年間で不法投棄物が増加し、処分費が2倍以上に膨れ上がっていることを掲載、大学に問題への対応を強く求めた。

連載を続ける中、17年1月には大学が動きを見せ始めた。同年1月号（3333号）では、大学側が学生宿舎の入居者に限り使用できる正式な粗大ゴミ置き場の設置を決め、不法投棄問題の解決を目指し始めたことを報じた。また、同年7月には大学がゴミ置き場に防犯カメラを設置し、学外者による不法投棄などを防ぐ取り組みを始めた（3336号）。問題は解決に向けて着実に進展している。

一方、同年12月号（3339号）では、正式に設置されたゴミ置き場に記者が3日間張り込んだ。結果、若い男性が8本のスキーストックを投げ入れたり、外国人の男性らが粗大ゴミを物色している様子を捉えた。進展が見られる一方、やはり不法投棄問題は依然として続いており、それが今でも負の連鎖を招いている可能性が高い。

コンテストではこうした地道な報道が評価されたが、同連載を担当する越智小夏副編集長（比文2年）は「地道な取材の成果が評価されうれしい。今後も宿舎の問題を追及していきたい」と話した。（本紙編集部）

駅前に数千個のランタン

【1面参照】つくばセンター地区活性化協議会が主催する「ランタンアート2017」が、12月16、17日につくば駅周辺で行われた。約7000個のランタンが会場を彩り、多くの見物客が訪れた。

会場ではつくば市内の小中学生が手作りしたランタンなどの展示のほか、芸術専門学群の学生が制作したランタンに来場者が投票する「オリジナルランタンコンテスト」も開催された。同協議会の鳳俊典さんは「SNSなどを使った宣伝の効果で多くの人が来場し、盛り上がった」と語った。（中村瑞歩＝日本語・日本文化学類1年）

学内でセンター試験

大学入試センター試験が1月13、14日に行われ、筑波大学では6780人が受験した。1日目は「地理歴史・公民」「国語」「外国語」を、2日目は「理科」と「数学」を実施した。（秋田耕平、12面に関連写真）

1920年の創刊以来、東京大学の「今」を発信し続ける
東京大学新聞
【新　聞】
最新の学術動向から身近な学内トピックスまで、日々東京大学から発信される旬なニュースを週刊でお届け。通常号のほか就職、大学院、受験、資格、入試等、テーマ別の特集号も含め年間 42 回発行
【出　版】
東京大学情報本　『東大 2017　とんがる東大』1,620 円（税込）好評発売中!
東京大学新聞年鑑『東大は主張する 2015－16』1,620 円（税込）好評発売中!
© 東京大学新聞社 2018
定期購読のお申込は、下記の電話番号もしくはメールアドレスまでご連絡ください。
■購読料金（送料・税込）1 年間…7,300 円／2 年間…14,200 円
公益財団法人東京大学新聞社
〒113-8691 東京都文京区本郷 7-3-1 東大構内
電話 03(3811)3506　E-mail post@utnp.org
ウエブサイト http://www.todaishimbun.org/company
オンライン版 http://www.todaishimbun.org/

耐震基準、漏水では床上浸水……

施設の現状と課題

【1面参照】第一エリアの1B棟とIC棟をつなぐ渡り廊下の屋根が12月10日に突然、崩落した。施設部などで現在、原因を調べているが、筑波大学の施設は建設から40年近くたち、老朽化が進んでいるものが多い。このうち約1割の建物は文部科学省が定める教育施設の耐震基準を下回っているが、改修の資金は不足している。老朽化が懸念される地下の配管をはじめ実際に問題が発生した現場などを歩き、老朽化対策の現状を探った。（木村誠＝人文学類、越智小夏＝比較文化学類、中村瑞歩＝日本語・日本文化学類、秋田耕平、飯田健介＝社会学類）

大規模改修は補助金頼み

施設はいま

現状

筑波キャンパス全体の施設面積の約6割は、1973年の開学後10年のうちに建設されており、改修が必要な建物が多い。これに対し、筑波大は「キャンパスマスタープラン」と呼ばれる施設整備計画を定期的に策定しており、最近では2011年に作られている。また、これとは別に学生宿舎の改修計画も策定されており、同計画に基づいて21年度から5カ年計画で改修が行われた。

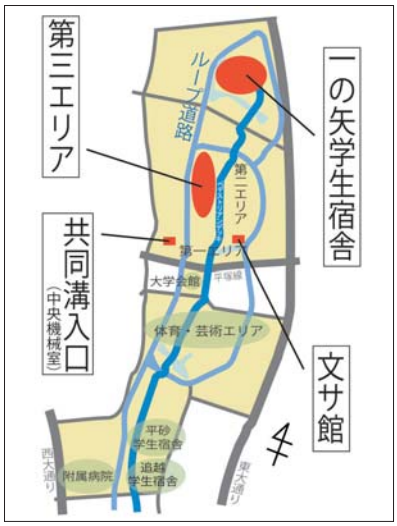
だが、11年の東日本大震災の影響や予算不足などから、施設の改修は順調に進まなかった。

施設部によると、完成から25年以上が経過し、かつ改修が必要な筑波キャンパスの建物は16年に622棟あったが、うち平成28年度末に改修が完了した建物は216棟と半数以下。建物の面積では約4割が改修されていない。また、文科省が定める教育施設の耐震基準を上回る施設の割合は91%にとどまり、全国平均の97・9%を下回っている。

改修など施設整備の資金確保は難しい。雨漏りや窓ガラスの破損などの日常修繕は、運営費交付金などの学内経費で対応する一方で、耐震一事などの大規模改修は文科省の施設整備の補助金で賄われる。

だが、この補助金も決して多くはない。施設部によると、今年度予算では、全国の国立大学法人などが文科省に要求した新規の施設整備のための補助金は約737億円。だが実際に予算化されたのは約177億円と約4分の1だった。ちなみに補助金を使った耐震工事の場合、当然耐震性の低い建物の工事が優先され（例えば学生宿舎の場合、耐震強度が比較的強いため改修の優先順位は低くなる）という。

一方、施設部が実施する改修は、トイレや廊下、教室など最低限必要なものに限られる。実験設備や各学類などが管理するラウンジなどの改修は、管理する各組織の予算で行われるという。



ルポ

①第三エリア

第三エリアの3C204。普段は隣接する計算機室の準備室として使用されており、コンピューターなどの電子機器類が並べられている。この部屋では12月18日、室内の洗面台から排水があふれだした。現在、この洗面台は排水口が栓とテープでふさがれ、水が流れないようになっている。洗面台の下やその周りの床には、漏水を吸収するための白い吸水パッドが敷き詰められていた。

漏水を起こした洗面台（12月26日、3C棟で）＝木村誠撮影

あふれ出た排水は洗面台から約1㍍離れたドアの下を通り、隣接する3C205へと広がった。同室は情報科学類生が使用する計算機室。コンピューター40台とプリンター3台などが設置されており、授業や演習でも使われている。

記者が部屋を確認すると、漏水の影響か床板が浮き、テープで固定されていた。排水が流れた跡と見られる茶色いしみも散見された。同室を管理する教員によると、漏水による電子機器への影響はなかった。教員は「漏電遮断器が作動し、確認すると漏水していた」と当時を振り返る。

②文サ館

第一エリアにある文化系サークル会館。1976年に建設され、文化系、芸術系の各サークルの活動の拠点となっている。ひび割れなどはないが、外壁は色あせ、時代の流れを感じさせる。

1階の男子トイレの入り口。「尿が降る」と書かれた手書きの張り紙が張られていた。中に入ると、天井には水漏れと思われるしみがあり、隙間が2㌢ほど空いていた。また「使用禁止」とか書かれた黄色いしみのある張り紙が、水漏れ部分の下の便器に張ってあった。同便器の下には吸水パットが敷き詰められ、水にぬれた跡が生々しく残っていた。

使用禁止の便器（12月26日、文化系サークル会館で）＝木村誠撮影

配管の腐食で「尿が降る」

施設部によると、漏水を起こした洗面台は床下の配管に水漏れと詰まりが見つかり配管の交換が必要と分かった。現在専門業者に修理を依頼しているという。

施設部によると、11月上旬に天井から水が漏れていると連絡があり、現場を確認すると、2階のトイレから出る配管が腐食し、1階の天井と2階の床との間に汚水がたまっていた。その汚水が天井の隙間から1階の男子トイレに漏れてきたのだという。

その2階の男子トイレの入り口は、黄色いビニールテープで封鎖されていた。特別に許可を得て中に入ると、薄汚れた壁や床のタイルなどが目につき、その古さも目立った。

「帰宅すると排水で浸水」

③一の矢宿舎

老朽化による事故は、学生宿舎でも起きている。

昨年10月5日深夜、一の矢学生宿舎2号棟の2、3階の数部屋で、部屋内を通る上階から排水管や、床の継ぎ目から水が漏れ始めた。漏水は約3時間続き、部屋によってはそ㌢ほど床上浸水したという。水は排水特有の臭いがし、清掃業者が到着する前から、居住する学生の大半が清掃活動を行った。同時にトイレも詰まっていた。

施設部によると、下水管とつながる直前の宿舎の排水管内部がさび詰まったことが原因で、このため建物内の排水管に排水が逆流、水圧のかかった排水管のつなぎ目から漏れ出したという。排水管は鉄製の管の外側にプラスチック製のカバーがかけられており、漏れ出した排水はこの管とカバーの隙間を伝わり、部屋内の排水管や床の継ぎ目から漏れたとみられる。

排水で約2㌢床上浸水した居室（12月5日、一の矢学生宿舎で）＝読者提供

排水が流れ出た部屋に住む男子学生（生資1年）は、「帰宅すると水があふれており、ぼうぜんとした。床にあった家電や雑誌はぬれ、全て使えなくなってしまった。パソコンも被害を受けた」と語った。一方、同棟に住む男子学生（社学1年）は、「自分の部屋は漏水しなかったが、今後自分の部屋でも被害が起きるのではとの不安から、事故の1カ月後にアパートに引っ越した」と話した。

消毒などの作業は事故から5日ほどたってからだった。アパートに引っ越した男子学生は、「塩素消毒は臭いがすごく、今でも衣類の一部に臭いが残っている。引っ越し代は出してくれなかったが、被害届を出したから的のパソコンや本の一部は補償された」と話している。

学生宿舎の給排水管は、2007年からの5年ほどで、当時老朽化の激しかった平砂、追越地区のものは改修された。だが、この時には一の矢地区の給排水管には老朽化が見られなかったことから、改修は行わなかったという。

④共同溝

筑波大学の地下5㍍には、全長約14㌔にも及ぶ共同溝が掘られ、水道やガス、冷暖房や電気などのライフラインを供給する配管が収納されている。共同溝は無電柱化による良好な景観整備や、ライフライン工事の際に通行の支障にならないことを目的に1973年から5、6年で整備された。

施設部によると、現在共同溝は1カ月に1回の巡回点検はしているが、共同溝の大幅な改修は建設以来行われていない。

第一エリアバス停の脇にある中央機械室から共同溝に入った。

地下へ続く階段を降りると、多数の配管やケーブルで埋め尽くされた空間が広がっていた。共同溝は狭いところで高さと幅2㍍、最も広いところでは高さ8・5㍍、幅3㍍で、一の矢学生宿舎から医学エリアまで、おおむねループ道路に沿って埋められている。共同溝の脇には2人が並んで辛うじて歩ける幅の点検用の通路もあった。

共同溝で最初に目にしたのは、学内の冷暖房を集中管理するための高温水管だ。学内22カ所の中央機械室のボイラーで作られた135度近くの高温水が各建物へと運ばれるが、同管には布が幾重にも巻かれ、高温水の温度を下げないようにしているという。高温の配管があるためか、溝内は暖かく、セーターを着ていると汗ばむほどだった。

溝内を150㍍ほど進むと深さ3㌢ほどの茶色い水たまりが通路全体を覆うように広がっていた。施設部によると、共同溝の継ぎ目から地下水などが入り込んできたという。一方、溝内には地下水などを集めて排水するための「釜場」と呼ばれるくぼみがあった。ここに貯められた地下水などは、一定量になるとポンプで排水されるという。

共同溝自体は老朽化が感じられなかった。施設部によると、大地震でも壊れない構造となっており、2011年の東日本大震災でも被害を受けなかった。ただ改修をしていないこともあるため、配管を保護する布が所々切れていた。また、この布のため、配管自体がどれほど老朽化しているかは確認できなかった。施設部によると一般的に老朽化は「分岐した細い配管から始まる」可能性が高いという。

床面に泥が堆積している共同溝（12月3日、共同溝で）＝木村誠撮影

記者の声

施設はいま

秋田耕平

屋根の崩落

施設部の情報公開 評価したい

早急な原因究明と対策を

【1面参照】12月10日午前7時45分ごろ発生した第一エリアの1B棟と1C棟を結ぶ渡り廊下の屋根崩落は、人命を危険にさらす重大な事故だった。事故発生が休日の朝で、被害者がいなかったことは正に不幸中の幸いと言わざるを得ない。大学側には早急な原因究明と安全対策を求めたい。

大学側の対応で、評価したいことがある。それは、施設部の積極的な情報発信だ。翌日の午後2時には崩落の概要をまとめた文書をホームページで発表。これを含め、発表は崩落以降10日間で計4回行われ、類似箇所の緊急調査の結果なども公表した。この姿勢は大学の信用回復にもつながったと思う。

ただ事故翌日の1B棟と1C棟では、午前中だけで1年生向けの総合科目など7つの授業が開講されていたが、これらの有無や両棟の安全性について連絡はなかった。受講生からは「休講の可能性を考えたが、大学から何も連絡がなく不安だった」との声も聞かれた。

情報公開の重要性を示す例は多い。2016年1月、カレーハウス「CoCo壱番屋」を展開する「壱番屋」（本社・愛知県一宮市）が廃棄した冷凍カツが、愛知県内のスーパーで販売される事件が発生した。「CoCo壱番屋」のパート従業員が偶然買い物中に発見し、すぐに会社に報告。同社は一両日中に事実を公表し、1週間で再発防止策を発表した。

カツの廃棄を依頼した業者が、廃棄物でないと偽り転売していたのだが、「CoCo壱番屋」も管理責任を問われ、信用を失う可能性があった。しかし素早い情報公開で、逆に同社の信用は高まり、事件発生後、その株価は前日の終値から160円値を上げた。

一方で、昨年10月明るみに出た神戸製鋼所（本社・神戸市中央区）の品質管理データの改ざん問題では、経営幹部は問題を把握後も1カ月以上それを公表しなかった。現在も同社は納入先を公表しておらず、消費者からは不安の声があがる。「安全性に問題はない」（同社）というが、データを改ざんした製品は自動車や家電、航空機などの工業製品に利用されており、不安は拭えない。同社の信用は下がり、株価は問題発覚後、1週間で500円以上値を下げた。

これらの事例の結論は、単純だ。地道で素早い情報公開は、その組織の透明性と信用を高める、ということだ。

屋根の崩落当日、本紙がツイッターやフェイスブックで速報したほか、筑波大生のSNSなどでも崩落情報が即座に広まった。一方、大学からの公開情報は施設部による事件概要に留まった。通常通り授業を行うにしても、その情報を伝えてさえいれば、学生たちの不安払拭につながったのではないか。

繰り返しになるが、大学には早急な原因究明と安全対策、そして素早い情報公開を改めて望みたい。（筑波大学新聞編集長・社会学類2年）

筑波時評

大谷翔平選手

二刀流は米でも通用するか

技術は通用 体調管理が鍵に

川村 卓（たかし） 准教授（野球方法論）

体育系・准教授。筑波大学硬式野球部監督。筑波大学人間総合科学研究科体育学専攻前期課程修了後、北海道の公立高校教員を経て2000年に同部監督に就任。09年から現職。

年末、友人であるロサンゼルス・ドジャースのスカウトと食事をしたときに、大谷翔平選手を獲得できなかったことを心底悔やんでいた。メジャーリーグから見ても大谷選手はかなりの逸材であることは間違いない。では、大谷選手の魅力とは何か？投打の両面から探ってみたい。

まず、「打者・大谷」から。打者としての魅力は何といっても放たれる打球の速度がずば抜けており、更に、その打球を広角に打てることである。日本人の平均的な打者が広角に打った場合、流し方向の方が15％ほど減速する。しかし、大谷投手は広角に打った時の打球速度がほぼ変わらない。そのため左打者の大谷選手がレフトに打つ本塁打が多いのである。本塁打に関して、2016年（22本）を見ても、そのうち45％（10本）がレフト方向であった。技術的に見てもスイングにおいて短い距離でバットを加速できるため、ボールを引き付けて打つ必要のある逆方向の打球でも大きなバットの力を生むことができる。よく内角に弱点があると言われるが、基本的に内角を攻められていないだけで、私が見る限り内角を打つ技術は持っている。確かに初めは多少苦しむかもしれないが、すぐに適応できると確信している。打撃練習を近くで見たことがあるが、パワーのある外国人と比べても打球速度など圧倒していた。強者が集まるメジャーの中でもその能力は発揮されるであろう。

次に「投手・大谷」では時速160㌔台を連発できる魅力があるが、実のところ改善点は打者以上にある。まずは投球に必要な体重移動のぎこちなさは改善すべき点であろう。これまで大谷投手の動作では足を挙げてから一度沈み込むような無駄な動きがあった。もう少し投球方向への移動が右足に力を残しながらスムーズにできると投球腕の負担をひなくできるであろう。そこに朗報なのはメジャーのマウンドが日本より固く、傾斜が急なことである。つまり、日本よりも投球方向に倒れこみやすく、そのエネルギーも生まれやすい。ステップ幅を狭くするなど工夫の必要はあるだろうが、早い段階に適応できれば、2ケタは勝てるのではないだろうか。

しかし、大谷選手が成功するにはメジャー特有の過密スケジュールをこなすだけのコンディショニングの維持ができるかにある。20連戦は当たり前で、アメリカ国内の時差もある。日本でも札幌―福岡の遠征はあったろうが、その約3倍の距離を移動し、すぐに試合という日程は普通でも難しいのに、どのように「二刀流」として行っていくか？球団側の姿勢も問われるが、大谷選手がどのように適応していくのか？誰もやったことがない挑戦が始まる。春の開幕が待ち遠しい限りである。

反射鏡

ハラスメントを考える

昨年10月、米の大物映画プロデューサーによる性的嫌がらせ（セクハラ）が明らかになった。それを機に、米の俳優らが次々と自身が受けたセクハラを告白し、その動きはSNSなどを通して世界的に広まっている。セクハラ以外にも権力を使った嫌がらせ（パワハラ）や教職員による嫌がらせ（アカハラ）など、学生生活ではさまざまなハラスメントに遭遇する可能性がある。身近に潜むハラスメントについて、筑波大学生はどう考えているのか。中央図書館前や体芸エリアで聞いた。（池田花於里＝比較文化学類1年、森賀遼太＝社会学類1年）

【体専4年・女性】

ハラスメントを受けたことはない。受け手の感じ方によってハラスメントかどうかは変わるので、人との関わり方を慎重にしていくべきだと思う。

【芸専1年・女性】

特に経験はないが、自分が気が付いていないだけかもしれない。ハラスメントは人に指摘されて、初めて自分が加害者だと気づくのではないか。人を傷つける側になるのは怖いので、悪意のある発言は気をつけようと思う。

【知識図書1年・女性】

SNS上で匿名だという理由で、さまざまな誹謗中傷が行われるのをよく見かける。身近に多い問題だと思う。

【芸専4年・男性】

昔は飲み会などで教員が学生に飲酒を強要することがよくあったと聞くが、今はそういうことはない。

【情科3年・男性】

男性があまり気にせず発した一言で、女性が傷つくという話をよく耳にする。自分も何気なくそういったことを話しているかもしれないので気を付けたい。

【エシス2年・男性】

就職での性差別や、米でのセクハラ告白運動についてのニュースを見るが、どれも自分自身の問題には感じられない。

【比文2年・女性】

セクハラをされたことはなく、そもそも性別の壁をあまり感じないので、そういった問題には無縁だった。

【社学1年・男性】

何かしらの制度を作って、上からの押し付けのような形で改善するというより、一人ひとりの心持ちの問題で解決できると思う。

【国総1年・女性】

極端に暴力的な発言や配慮のない発言は慎むべきだ。だが、相手が無意識に発言している可能性を考えた上で、過剰に反応せず、対処することが必要だと思う。

【文文2年・男性】

加害者側の罪の意識が希薄で、被害者側は相手との関係性を壊したくないがために、周囲に話しづらい雰囲気になっていることが問題だと思う。

【体専2年・男性】

ある大学の先生が自身の言動をひどく気にしながら学生と接していた。ハラスメントはもちろん問題だが、過剰に気にしながら生活するのは息苦しいと感じる。

【芸専2年・女性】

正直ハラスメントについて深く考えたことはないが、パワハラなど相手を逆らえない状況におくのは良くないと思う。学校でハラスメントの相談や告白ができる機会がもっと多くなると良いと思う。

雪の思い出

大みそか、つくば市で初雪を観測した。これから冬も本番になっていく中、筑波大学生は雪に対してどのような思い出を持っているのだろうか。石の広場や中央図書館前などで聞いた。（秋田耕平＝社会学類2年、竹添そら＝知識情報・図書館学類1年）

【人文1年・女性】

雪が降る中、歩道橋の階段を上っていると、向かいから自転車を押して下りてきた男性が突然転倒し、自転車の下敷きになっているのを見た。

【物理3年・男性】

入学して2日後に大雪が降った。当時住んでいた学生宿舎は暖房がつかず、凍えそうになりながら一夜を過ごした。実家に帰りたいと思った。

【目白1年・女性】

高校生の頃、大雪になったが休校にならず、仕方なく登校したが、先生が休んでいて、午前中ずっと修学旅行でひめゆりの塔に捧げる千羽鶴を折っていた。高校は午後に休校になった。

【教育4年・男性】

5歳の頃、祖父と一緒に列車で城崎温泉に出かけ、初めて雪を見た。だがその旅で風邪をひき、また父親に黙って出かけていたことがばれたため、祖父が怒られていた。

【物理2年・男性】

中学生の頃、積もった雪に気を取られ、犬のフンを踏んでしまった。

【目白3年・女性】

家族でのスキー旅行に、熱風邪をひいて私だけ行けなかった。一人家で苦しんでいると、グループLINEにのんきな家族の写真が投稿されてとても腹が立った。

【人文4年・男性】

小学校の途中で北海道から鹿児島県に引っ越しをした。冬に雪がうっすらと積もっただけで同級生がお祭り騒ぎしていて、北海道のパウダースノーを懐かしく感じた。

イラスト＝長手彩夏（地球学類4年）

【知識図書1年・女性】

滋賀県に住んでいた頃、出産のために産婦人科に入院していた母のもとへ、雪の中祖母と毎日お見舞いに行っていた。

【メ創4年・男性】

幼稚園の頃、家の周りの道路がうっすらと凍結していた。通園バスを待つ間、氷で滑って遊んでいたら「転ぶと危ないからやめなさい」と母親から叱られた。そして駆け寄ろうとした母親が滑って転んでいた。

訂正とおわび

339号4面の反射鏡「好きな映画」において、芸専1年・女性が答えた映画を「サマー・ウォーズ」としましたが、正しくは「ザ・ウォーズ」でした。おわびして訂正いたします。

吹奏楽団 第78回定期演奏会

ツクバダイン登場に観客沸く

530人が来場

吹奏楽団の第78回定期演奏会が、12月8日にノバホール（つくば市吾妻）で行われた。同演奏会は3部構成でメドレーを含む全11曲が披露され、約530人の観客を魅了した。

第1部はフィリップ・スパーク作曲「FIEST A!」のサックスとホルンのファンファーレで幕を開け、華やかな音色が会場を包んだ。「海の男たちの歌」ではピアノとオーボエの旋律で静かな海を、ホルンの音で力強い出港を表現。観客を勇ましい船乗りたちの世界観に引き込んだ。

曲の世界観を音色や演出で表現する団員たち（12月8日、ノバホールで）

第2部は「Pops Stage」と題し、ディズニー映画の曲やゲーム「モンスターハンター」のテーマ曲など6曲を披露。ヒーローアクション同好会のヒーロー「ツクバダイン」やその敵「シュート」が曲中でサプライズ登場した。

「ツクバダインのテーマ」に合わせて登場したツクバダインは団員を連れ去った敵との戦いに奮闘。「Mr. インクレディブル」などの演奏を背景に、疾走感あふれる舞台を演出した。

第3部では、アイルランドの歌とダンスで構成される舞台「Riverdance」から5曲を披露。アイルランド人の移住の歴史や多様な民族との交流を題材とした舞台の空気感を、生命感あふれる演奏で表現した。

同演奏会で同団を引退する縄田朋夫さん（知識図書3年）は「選曲や演出など全て自分たちで考えたので、絶対に成功させようと思った。吹奏楽を続けてきて本当によかった」と話した。（池田花於里、写真も）

絶対音感

M.A

キャンドルにジャズの音色

JAZZ愛好会のクリスマスコンサートが12月24日に1H棟で行われた。キャンドルが暖かに光る中、ピアノ、ベース、テナーサックス、アルトサックス、ドラムで構成されたバンド「ぽんぽんぺいん」が全6曲を演奏した。

ジャズは、アフリカの民族音楽と西洋音楽が融合し、19世紀にアメリカ南部で誕生した。裏拍にアクセントを置く独特なリズムや、即興的なアレンジ奏法が特徴だ。各楽器のアドリブによるソロパート（ソロ）も聴き所のひとつ。ソロを終えるときには、次の奏者に目配せで合図し、息の合った演奏をみせる。

1曲目は、軽やかな旋律が特徴の「Wrap Your Troubles in Dreams」。原曲の歌詞は前向きだ。気持ちが塞ぐことを曇天にたとえ、「空が灰色に曇ったとしても／それは長くは続かない」と歌う。そして、「雨の後には必ず太陽がやってくる」と続けられる。

「ワン、ツー、スリー」というドラム奏者の合図から始まり、ふたりのサックス奏者が、流れるように軽快でリズミカルな音色を奏でた。長調の穏やかな曲調に沿って、「空が灰色に～」と明るく歌う原曲の歌詞を彷彿とさせた。

2曲目は、「Recorda Me」。冒頭、ピアノの独特なリズムに引きこまれる。表の拍で小刻みに休符を入れることで、強拍と弱拍の位置が通常と変わり、躍動感あるリズムが刻まれた。思わず体が揺れた。

独特なリズム感とメロディーで観客を楽しませた（12月24日、1H棟で）＝飯田健介撮影

続くドラムやベースのソロでは、ベースの鋭い音はっとした。楽器に寄り添うように弦をかき鳴らすのは佐藤亘さん（知機2年）。主に低音域を担当し曲の土台を作るベースだが、ソロでは一転、2オクターブほどの広音域を、体全体で演奏。その場に即した音をアドリブで探りながら奏でた佐藤さんは演奏後、「激しく動くので疲れた」と話したが、満足げだった。

最後の曲は、6曲の中で最もテンポが速い「Lover, Come Back to Me」。高速道路を駆け抜けるような、疾走感のあるテナーサックスの主旋律が印象的だ。音が上がった先の2分音符を十分に響かせることで、テンポこそ速いが、開放的な旋律に。そこに、ト長調のコードに沿ったピアノの和音が重なり、爽やかな音の広がりを見せた。

明るい曲調だが、原曲では恋人よ、どうか戻って来て」と別れた恋人に思いを寄せる。切なさや未練がましさを、あえて明るく振り切るように、サックスの音色は激しさを増す。恋人のいない助手席の寂しさを埋めるように高速道路を走り続ける車を連想させた。

今回で引退のテナーサックスの池田帆夏（日4年）さんは、「やりたかったことを全部やれた」と話した。（豊岡恵＝比較文化学類1年、吉永真理＝生物学類2年）

「隠したい表情」描く

若手の作品が集結

国内外の大学間交流を目的とし、若手芸術家の作品を展示する「ファインアート・ユニバーシアード U-35展」が11月28日から12月10日までつくば美術館（つくば市吾妻）で開催された。国内外の94大学から計117点の作品が出品。その中から市川絢菜さん（平成28年度芸術専攻修了）の「フェイスカバー」が優秀作品賞を受けた。

同展は、筑波大学芸術系が文化庁からの委託事業として2013年に始まり、今年で5回目。20年の東京五輪の公認プログラムにも認定されている。

優秀作品賞を受けた市川さんの作品は、服の試着の際に化粧で服を汚さないように被る「フェイスカバー」から着想を得た版画作品。20の顔を全面に描き込んだ紙の四隅を、それより大きい木枠に紐で固定し、透明なビニールを重ねた。

20もの顔は、実は人に見られたくない表情や内面。それに重ねたビニールには、大きく人間の輪郭を描き、その中心を赤色で楕円形に塗りつぶした。

市川さんは「誰にでも他人に隠したい表情や姿があることを作品にこめた。審査員の目に留まり、批評されたことで課題も見つかったと話した。（鈴木瑞穂＝人文学類2年、写真も）

市川さんの「フェイスカバー」（12月9日、つくば美術館で）

プレ卒展開催

芸術専門学群構成専攻の3年生の作品を展示する「構成特別演習作品展（プレ卒展）」が12月12－20日、総合交流会館で開催された。絵画や映像作品など37作品が展示され、約500人が足を運んだ。

髙松航希さん（芸専3年）の作品「Format Interface」は、鏡の破片を張り合わせたものに暗室で照明を当て、壁に反射した光の模様を映し出した。作品を鑑賞した女子学生（メ創3年）は「光の模様がバラのように見えて素敵だった」と話した。（秋田耕平、12面に関連写真）

私の一冊

『エセー』

ミシェル・ド・モンテーニュ著

宮下志朗訳（白水社）

言葉の真の意味における古典

津崎 良典 准教授（仏哲学）

人社系・准教授。哲学博士。パリ第一大学パンテオン＝ソルボンヌ校客員研究員、筑波大学人社系助教などを経て、2015年4月より現職。近著に『デカルトの憂鬱』（扶桑社）。

山羊よろしくその紙片を一枚ずつ食べるかのように字引を読むことを人生のハビトゥスとする人文学徒には周知のとおりだろうが、あえてここに記すなら、日本語の「古典」という言葉に相当する欧米語は、ラテン語の「classicus」を語源とし、かつ、この古語には「船」という意味があるのである。ラテン語が話されていた古代ローマ帝国は、地中海に跨る巨大な領土を有していたから、この紺碧の海を無事に航行できる船の有無は国家の存亡に決定的に関わることであった。そこから、人類の生存を左右する重要な何かを意味するためにこの古語が広く使われるようになったことは、現代日本の悪政のために霞を食うが如き大学人に限らず、誰しも容易に想像がつくだろう。そこでここでは、一切の躊躇いを感じないわけではないが、その深い学びに一心不乱に取り組むことで、見通し不透明な時代の困難な課題がたとえ洪水のように我が魂に及んでも、それに知的なしかたで立ち向かい、生き延びていくための術を与えてくれる、言葉の真の意味における古典を、本紙の読者諸兄姉に「私の一冊」として披露することにしよう。その一書とはしかし、私が学生に対して常日頃から、アカデミアを去って何処に旅立とうと必ず右側のポケットに短剣のように隠し持っておけと耳打ちするデカルトの『方法序説』（1637年）でも、左側のそれに念珠のように忍ばせておけと勧奨するパスカルの『パンセ』（1670年）でもない。大部であるため、到底ポケットには収まりきらない、この二人のフランス人思想家の精神的支柱として聳え立つモンテーニュの『エセー』である。1533年に大西洋に面する裕福な都市ボルドーに産声を上げたこの男は、当地の高等法院評定官や市長を務めたのち、読書と思索の生活に入り、古典文芸「復興」と新世界「発見」の興奮のうちに花開いたルネサンス人文主義の広く深い教養に裏付けられた鋭利な人間観察からなる本書を執筆、1580年に第一巻を刊行、その後も執筆を続け、1588年までに全三巻一〇七章を読書人に差し向けた。「私は何を知っているか（Que sais-je?）」に約言される穏健な懐疑主義的精神のもと、事物の本質には到達できず、その現象に関する知見に留まらざるを得ない人間理性の悲しく哀れな有り様を徹底的に反省し、自己と世界の揺れ動く姿をそのまま描き出す独特な文体を採ったこのモラリストは、宗教戦争の最中である1592年に斃れたが、その栄光は現代にまで豊かに降り注ぎ、ニヒリズムの憂いを色濃く纏ったニーチェまでをして、「このような人間がものを書いてくれたおかげで、この地上に生きる喜びは本当に大きくなった」と言わせしめた。ニーチェよろしく虚無感と絶望感を抱かないで過ごすことの著しく困難な今日日の筑波大学において、それでもまだもう少し教育と研究に携わろうと思えるとしたら、それは本書のおかげであると素直に率直に認めざるを得ない。

◆おことわり

筆者の意向で、改行を行わず、また年月を除き、漢数字で掲載しました。

ぶらり俳句 筑波大

「冬の水」

・冬の水墨の如くに光りをり

・鶏鳴や赫き草泛く冬の水

・睦月はや友去ることも池のまへ

撮影地＝松美池 越智小夏撮影

季語には「本意」がある。その言葉から湧く万人共通のイメージのことだ。池は一年を通して水を湛えていて、その水質が季節によって大きく変わるわけでもないが、「冬の水」という言い方をすると、なんだか水まで寒さに沈んでいるような、どこか重々しくて暗い印象になる。これが「冬の水」の本意。季節の感覚と言語の感覚が密着するのが季語の世界だ。（堀下翔＝比較文化学類4年）

栄光の4年間を終え次の舞台へ

スポーツの強豪校として次々と一流のアスリートを輩出してきた筑波大学。今年も、輝かしい成績を残した多くのアスリートたちが旅立つ選手らにその軌跡と抱負を聞いた。折も経験した4年間を終え、新たな舞台へ旅立つ時を迎える。栄光も挫（益本健太＝人文学類、森賀遼太＝社会学類、吉永貞理＝生物学類、明石尚之＝体育専門学群）

ゴールへの抜群の嗅覚

中野誠也（サッカー）

ディフェンスを振り切り、シュートを放つ中野（7月12日、天皇杯3回戦・アビスパ福岡戦で）＝小宮山瑛生撮影

昨年4月から行われた天皇杯。筑波大はJ1・ベガルタ仙台を含む3つのJクラブを撃破し、サッカー界に衝撃を与えた。「ジャイアントキリング」旋風を巻き起こしたチームの中心にいたのは、勝った3戦全てでゴールを挙げた中野だった。

ゴールへの抜群の嗅覚を武器に絶対的ストライカーとして君臨。一昨年の全日本大学選手権（インカレ）では最優秀選手賞、昨年の関東大学リーグでは得点王を獲得し、それぞれ優勝に大きく貢献した。

中学生の時からJ1・ジュビロ磐田の下部組織で活躍した。が、トップチームから声がかからなかったため、筑波大に進学。すぐにスタメンに定着したが、その年、チームはリーグ2部に降格した。「悔しかった。なかなか勝てない辛さを経験した。しかし翌年のリーグでは、最終節でチームを1部昇格に導く値千金のゴール。その悔しさを晴らした。

3年生になると、試合分析など、ピッチ外でサポートする部員の姿から、「チームを一人ひとりへの感謝の気持ちを持つように」なった。仲間のために戦う意識を持つことでより強くなれた」と、これまで以上に献身的な姿勢でサッカーに臨むようになった。この結果、その年のインカレでは、全試合でゴールを決め、計8得点。最優秀選手賞にも選ばれ、チームに13年ぶりの優勝をもたらした。

そして、最終学年となって迎えた昨年。天皇杯ではJクラブ相手に躍動した。持ち前の得点力で3戦合計5ゴールを決め、3度のジャイアントキリング」の原動力となった。4回戦のJ1・大宮アルディージャ戦で敗れ、ベスト16に終わったが、「少しでも大学サッカーの価値を証明できた」と振り返る。さらに、関東大学リーグでは、歴代最多タイの20得点を挙げ、13年ぶりの優勝に貢献した。

今後は、高校まで下部組織でプレーしたJ1・ジュビロ磐田への入団が内定している。「小さい頃から憧れていたクラブなので、戻ることが出来てよかった。感謝の気持ちを胸に、応援される選手になりたい」

（体専4年）

盤石の強さで日本一

辻川美乃利（陸上）

他の選手を圧倒する投てきを見せる辻川（6月25日、日本選手権で）＝本人提供

昨年の6月、日本選手権の円盤投げで、実業団の選手を圧倒する51㍍27㌢の記録で優勝。その後も快進撃は止まらず、9月の日本学生対校選手権（日本インカレ）でも、自己ベストを更新する52㍍56㌢で優勝を果たした。

――――――

円盤投げと出会ったのは、中学3年の時。全国大会の砲丸投げで入賞を果たせず、失意に沈む中、当時の顧問から170㌢の高身長と手足の長さが円盤投げに有利と言われたことがきっかけとなった。高校入学後、本格的に円盤投げを始め、高校3年の春には全国ランキング1位に。しかし、その年のインターハイは6位と、自分にとって満足いかない成績だった。「力を出し切れなかった」と当時を振り返る。

筑波大に入学すると、その整った環境に圧倒された。高校時代は朝に30分のみ許されていた投てき練習が大学では1日中可能で、ウエートトレーニング場や陸上競技場など設備は充実していた。

筑波大では投てき種目を専門にする女子の上級生は、全員が全国大会で優勝を経験しており、高校時代の指導者の「筑波に行ったら埋もれる」という言葉が脳裏をよぎることもあった。だが、強い選手に囲まれた環境だからこそ、「なんとかして仲間入りしたい」と、常に向上心を持って練習に取り組むことができたという。

これに加え、投てきコーチの大山圭悟准教授（体育系）による、各選手の肉体的、精神的状態を正確に把握したきめ細かい指導を受けた。試合の直前期には、つきっきりで練習の面倒を見てもらうなど、二人三脚で記録向上を目指した。充実した環境と献身的な指導のもとで、精力的に練習を積み重ね、記録は飛躍的に向上。どのような状況でも飛距離が安定するようになった。

培われた盤石の強さは、昨年6月の日本選手権で遺憾なく発揮された。円盤投げ決勝では3回試技を行い、その中で上位8位に入ると追加で3回試技が行えるが、日本選手権で優勝を決めた試技は合計6回のうち、2回目という早い段階。2位に1㍍以上の大差をつけていた。更に、9月の日本インカレも自己ベストを大幅に更新する投てきで日本選手権の勢いそのままに制覇した。

卒業後は、筑波大の大学院へ進学する。今後の目標は、2019年にイタリアで行われるユニバーシアードへの出場。同大会への出場は大学入学時からの目標だった。大学院卒業後は実業団に入ってできる限り競技を続けたいと意気込む。

日本一になれた理由を聞くと「たまたま運がよかっただけ。素晴らしい指導者や先輩、仲間に出会えた」と語る。日本一という快挙を達成したにもかかわらず、謙虚なその姿勢こそが強さの秘訣なのかもしれない。

（体専4年）

大舞台での勝負強さ

平山友貴奈（競泳）

昨年、9月の日本学生選手権（インカレ）の100㍍バタフライで優勝。4月の日本選手権でも5位入賞を果たした。また、初の国際大会となった8月のユニバーシアードでは、400㍍メドレーリレーで第3泳者（バタフライ）として優勝に貢献するなど、筑波大女子の絶対的エースとして存在感を発揮した。

4歳で水泳を始めた。中学3年の時には、全国中学校体育大会の100㍍バタフライで準優勝。高校時代も全国大会決勝進出の常連だったが、優勝することはできなかった。

日本一まであと一歩届かず伸び悩んでいたが、筑波大に進学後、眠っていた才能が徐々に開花した。1年時のインカレでは、100㍍バタフライで決勝に進出。400㍍メドレーリレーでは1年生ながら第3泳者を任された。

だが、2年生になると伸び悩んだ。インカレで予選落ちを経験し、1年間自己ベストを更新することができなかった。「練習に対する考えが甘かった。大学では自分に必要な練習を自分で考えなければいけない」と反省し、弱点の持久力を向上させる練習を取り入れた。

迎えた翌年のインカレでは100㍍バタフライで3位。表彰台に立ち、1年前のインカレで味わった雪辱を果たした。また、リレー3種目全てに出場するなど、チーム最多の10レースを泳ぎ切った。この結果リレー3種目全てで3位に入る快挙を達成し、4年ぶりの女子シード権獲得に大きく貢献した。絶対的エースとして成長し、「目標としていた表彰台に立ててよかった。やってきた練習は間違っていなかった」と自信をつけた。

最終学年の昨年は、日本選手権5位入賞の好成績が評価され、ユニバーシアード日本代表に初選出された。そのユニバーシアードでは、堂々とした泳ぎを見せて50㍍バタフライで3位。更に、第3泳者を務めた400㍍メドレーリレーでは優勝に貢献した。

最後のインカレは女子主将として臨んだ。「泳ぎでみんなを引っ張りたい」。その気持ちが通じ100㍍バタフライでまだ一人58秒台と、圧巻の泳ぎを見せ優勝。50㍍自由形でも2位に入るなどチームを牽引した。

今後は茨城県庁の職員として選手を続け、2020年東京五輪の代表入りを目指す。近年活躍が著しい中高生スイマーなどライバルは多いが、大学での経験や大舞台での勝負強さは大きな武器となる。「まずは日本代表の常連になれるように努力したい」。挑戦は続く。

（体専4年）

東京五輪目指す

前半から攻める勝負強い泳ぎが武器の平山（1月14日、新年フェスティバルで）＝明石尚之撮影

旅立つアスリートたち

エースとして黄金期支える

杉浦佑成（バスケ）

「点を取るのは自分の仕事」

一昨年、主要大会3冠・全日本大学選手権（インカレ）3連覇を達成し、昨年も関東大学選手権優勝、インカレ準優勝を果たすなど黄金期を築いた筑波大男子バスケットボール部。その中で杉浦は抜群の得点力でチームを支えた。

馬場雄大（体専4年）とともに入学当初からダブルエースとして活躍。力強いドリブルからのシュートや、思い切りのよい3Pシュートなど、どこからでもシュートを決める姿は、正に大学NO．1プレイヤーだ。

中学生でバスケットボールを始め、高校は名門福岡大学附属大濠高校に進学。高3時にはウインターカップ準優勝などを果たした。

筑波大へ進学後、すぐにスタメンに抜擢された。初めてのインカレでは、チームトップの1試合平均17・4得点を達成。61年ぶりの優勝に貢献した。「当時最強の東海大に勝ち、日本一になれたことが本当にうれしかった」。また、翌年にはインカレ連覇を果たした。

3年生となった一昨年は、筑波大史上最強の1年となった。

まず57年ぶりに関東大学選手権、14年ぶりに関東大学リーグ戦を制覇。更に、インカレでは3連覇を達成。主要大会3冠・インカレ3連覇は筑波大初の快挙となった。

インカレで最優秀選手賞に選ばれた杉浦は、勝負強いシュートで1試合平均22・8得点を挙げ、3連覇の立役者に。「狙っていた」との言葉通り得点王も獲得した。「本当に強い代だった。いつも通りプレーできれば勝てるという自信があった」と、3冠・3連覇を果たしたこの年を振り返る。またインカレ後には、日本代表重点強化選手に選ばれ、Bリーグのサンロッカーズ渋谷に特別指定選手として入団するなど飛躍の年となった。

「点を取るのは自分の仕事」と話すように、得点にはこだわりがある。持ち前の思い切りのよさで、どん欲に得点を狙う姿は主将・筑波大の象徴だった。

だが最終学年の昨年は、杉浦にとって試練の年となった。関東大学選手権では決勝の白鴎大戦を115－57で制し優勝したが、連覇を期待された関東大学リーグ戦では、まさかの5位。昨年6月にダブルエースとして、ともに筑波大を支えてきた馬場が、Bリーグのアルバルク東京への電撃入団を機に離脱したことに加え、けが人が続出し、メンバーが安定しないことが敗因だった。

更に、最後のインカレでは、準々決勝、準決勝ともに3点差の大接戦を制し、決勝へ駒を進めたが、4連覇を果たすことはできなかった。試合後、溢れる涙が抑えられない。「終わったな」と思った。自然に涙がこぼれた。

「最後に負けたからこそ次は絶対に勝ちたい」と、その悔しさは新たな舞台での闘志に変わっている。既にBリーグのサンロッカーズ渋谷に入団し、プロデビューを果たした。今後の目標はスタメンに定着することで、将来的には日本代表も目指す。「まずは試合に出ることが大事。泥臭いプレーで結果にこだわりたい」（体専4年）

高さを生かし、ゴールに迫る杉浦（5月7日、関東大学選手権決勝・白鴎大戦で）＝益本健太撮影

信頼関係が支えに

加藤美幸・柏原みき（バド）

左が加藤、右が柏原。

昨年10月の全日本学生選手権（インカレ）女子団体決勝。勝ては4連覇となる一戦で、相手を圧倒しチームを優勝へと導いた。インカレ4連覇に加え、関東リーグ戦5季連覇も果たし、「絶対王者」の異名を持つ筑波大バドミントン部の女子チーム。その支柱は加藤・柏原ペアだった。

2人とも、小学生でバドミントンを始めたが、2人が初めて話したのはU－19の日本代表合宿。中学時代に練習試合で対戦したこともあった。

筑波大入学後、運命的な再会を果たし、顧問の勧めでダブルスを組むことに。初試合となった1年生の春季リーグ戦では、団体3位と優勝を逃したが、同年のインカレでは団体戦の8年ぶりの優勝に大きく貢献した。その後は、2人の活躍もあり順調に好成績を重ね、周囲から「筑波大は絶対王者」の声が上がるようになった。

だが、3年生のインカレで転機が訪れた。団体では優勝を果たしたが、2連覇を期待されていた個人戦ダブルスで、まさかのベスト16敗退。「今回も勝てるだろうという甘い考えがあった」（加藤）期待が大きかった分、敗退のショックは大きく、しばらくの間立ち直れなかった。

そんな中、支えとなったのは2人の信頼関係だ。「試合や練習のことだけでなく、普段から多くの話をする。何でも打ち明けられる関係」（柏原）。インカレで個人戦優勝を逃した後も、何度も話し合った。4年生になると、「2人で戦える最後の1年となる可能性もある。何としても勝ちたい」という思いを持ち、気持ちを切り替えた。

そして迎えた最後のインカレ団体4連覇を果たし、1年前に敗退した個人戦ダブルスでも優勝した。「うれしさと同時に（期待に応えられた）安心感があった」（柏原）。「絶対王者」の名に恥じない結果で有終の美を飾った。

几帳面で真面目な柏原と、マイペースな加藤は、真逆の性格だという。しかし、試合になると、前衛の加藤が相手の動きを読んで打ち返しにくい球を送り、後衛の柏原のスマッシュに繋ぐという非常に息のあったプレーを見せる。「加藤に任せる。これまで以上に強くなり、結果を残したい。2年後の東京五輪も視野に入れている」という2人は、今後も「二人三脚」で歩んでいく。（ともに体専4年）

信頼関係が強みの加藤（手前）・柏原ペア（10月22日、インカレ団体決勝・龍谷大戦で）＝明石尚之撮影

◆おことわり

「卒業生からの手紙」は休みます。

「珍渦虫」の新種を発見 生物進化過程の研究進む

中野裕昭准教授

中野裕昭准教授（生環系）らの研究チームは、動物の共通の祖先に近いとされる海の生物、「珍渦虫（ちんかちゅう）」の新種2個体を2013年から15年にかけ、東北沖と三浦半島沖の海底で発見した。珍渦虫は過去、世界で5種が見つかっているが、日本での新種発見は初で、生物の進化の過程の単純な構造から系統的にどの動物に近いのか判断が難しく、その分類が議論されてきた。

だが最新のDNA解析から、脊椎動物門に比較的近い動物、または動物の共通の祖先に近い動物に関する研究が進展することが期待されている。

珍渦虫は海底をはって移動する動物。腹側に口とそれに続く腸のような袋構造を持つだけの非常に単純な構造で、脳や中枢神経系、生殖器、肛門はない。このような構造は全ての動物に共通する祖先の形質を引き継いでいるともされ、動物の起源や進化の研究で注目を浴びている。しかし、その繁殖方法や成長過程など未解明の問題も多いうえ、系統樹＝※＝での詳細な位置づけも分かっていない。このため、動物の起源をたどるためにも、これらの謎の解明が期待されている。

同チームは北海道大や実験センター（静岡県下田市）でのDNA解析などで新種と判明した。

さらに、中野准教授はこの2個体の内部構造の観察・解析で、立体構造を画像化できるマイクロCTを世界で初めて珍渦虫に使用。その結果、腹側の前方に一つの小さな孔（あな）を発見し、それが珍渦虫の器官だとも分かった。これについて中野准教授は「海底をはう時に分泌される粘液を体外に出すための孔ではないか」と推測している。

中野准教授はこれまでスウェーデン沖で採集した珍渦虫を研究していたが、▽現地では水面が凍り採集できない時期がある▽日本に到着するまで時間がかかる……などの難点があった。今回の日本近海での発見は、これらの難点を解消し、日本での研究の効率化につながると期待されている。今回の一連の成果をまとめた論文は、12月、生物系の専門誌「BMC Evolutionary Biology」に掲載された。

中野准教授は「珍渦虫の生態や系統関係の解明は、動物の進化の理解につながる。今後は、実験所で珍渦虫が飼育できる条件なども併せて研究していく」と話している。（吉永真理＝生物学類2年）

※系統樹＝生物の進化やその分岐の道筋を樹木の枝のように表したもの。

自転車トラックレース W 杯 女子オムニアム

梶原悠未 ２戦連続金メダル

厳しい展開も逃げ切り優勝

相手に抜かれないように走る梶原（12 月 9 日（現地時間）、サンティアゴで）＝本人提供

自転車

トラックレースの世界大会であるUCIトラックワールドカップ（W杯）第4戦が12月8－10日（現地時間）にサンティアゴ（チリ）で行われ、梶原悠未（体専2年）が女子オムニアムで優勝した。梶原は前回のW杯第3戦でも優勝しており、同種目での2連勝となった。

オムニアムはスクラッチ・テンポレース・エリミネーション・ポイントレースの4種目のレースの総得点で競い合う。各国の代表選手1人ずつ、総勢14人が出場。梶原は日本代表としてレースに参加した。

1種目目のスクラッチは、トラック上で10キロの距離を走り、最終順位を競う種目。梶原は、中国とウクライナの選手ら2人に1周追い抜かれたが、4位でゴールし、良いスタートを切った。

2種目目のテンポレースは、トラックを毎周先頭で通過した選手が1点を獲得し、全26周での総得点で勝負を決める。梶原は序盤から積極的に得点を獲得し、最終的にほかの選手を1周追い抜いて1位で終えた。

3種目目はエリミネーション。2周ごとに最下位の選手が失格となり、最後まで残った選手が勝利する。梶原は、常に先頭付近に位置取り、最後はメキシコの選手との一騎打ちを制し1位を獲得。首位で最終種目に進んだ。

最終種目のポイントレースは、総距離20キロのうち、2キロごとの通過順で得点が与えられ、合計点を競う。暫定1位の梶原は、高得点を狙う相手選手への対処に追われ、1周追い抜きによる特別得点を防ぐためにスピードを出す必要があった。体力を削る厳しい展開となったが、逃げ切ることに成功し優勝を果たした。

梶原は「今まで勝てなかった選手たちに勝つことができ、自信がついた。今後は世界選手権などに向けて対策を立てていきたい」と話した。

（佐藤巧基＝物理学類2年）

「目標は東京五輪で金メダル」

インタビュー

12月9日（現地時間）にサンティアゴ（チリ）で開催された自転車競技の世界大会、UCIトラックワールドカップ（W杯）第4戦の女子オムニアムで、第3戦に続き優勝を果たした梶原悠未（体専2年）が本紙インタビューに応じた。「より大きな大会で表彰台を目指さないといけないと実感した」「東京五輪で金メダルをとることが最大の目標」――。W杯の感想や今後の目標などを聞いた。

（聞き手・佐藤巧基）

W 杯の振り返りと今後の目標を語る梶原（12 月 14 日、5C 棟で）＝明石尚之撮影

――W杯第3戦、第4戦でのオムニアム2連勝を振り返っての感想は。

今までは自分の実力に自信がなく、周りの選手に気後れしていましたしかし、今回は自信を持ち、自分の強みを出して走れたので金メダルを獲得できたと思います。W杯と世界選手権でもうれしかったです。しかし、大会の結果には満足しましたが、思った以上に達成感がありませんでした。そのため、世界選手権のうちの1つを達成できたと思ってしまいました。

――W杯第2戦では、チームパーシュート（団体追い抜き）で銅メダルを獲得しましたが、オムニアム以外の種目の現状は。

オムニアム以外の中距離種目では団体追い抜きと（2人1組でレースを行う）マディソンに出場しています。団体追い抜きは、チーム全体の実力が向上したことと、イアン・メルビンヘッドコーチの采配のおかげで第2戦で銅メダルを獲得できました。マディソンは、第2戦で初めて出場しました。第4戦では4位に終わり、表彰台に立つことはできませんでしたが、一歩一歩前進していると実感しています。また、ロードレースの日本代表チームにも所属しています。ロードレースは、出場人数が多く集団の中での位置取りが難しいので、その技術がオムニアムに生かせます。

――この1年間を振り返ってください。

昨年2月のアジア選手権では1位となり、満足のいく結果でした。ですが、4月の世界選手権では、大会直前の落車によるけがの影響で、万全の状態で挑めず11位に終わってしまいました。それからは結果が出ず、周りから「強くなってないね」と言われることもありましたが、自分は強くなっていると信じていました。W杯でついに努力が報われました。

――今後の目標は。

2月のアジア選手権では必ず優勝して、2、3月の世界選手権では表彰台に立つことです。1番の目標は2020年東京五輪で金メダルをとることです。五輪で金メダルをとり、日本ではまだマイナースポーツの自転車競技を有名にしたいです。

◆

梶原悠未（かじはら・ゆうみ）

1997年4月10日生まれ、埼玉県出身、20歳。2016年に筑波大学に入学。高校から自転車競技を始め、14年の全国高校選抜大会の3種目で優勝。17年にW杯第3戦の女子オムニアムで日本人初の金メダルを獲得し、第4戦でも優勝を果たした。

関東大学リーグ戦

創部史上初の２部優勝

アイスホッケー

関東大学リーグ戦ディビジョンⅡが昨年9月2日から11月25日にダイドードリンコアイスアリーナ（東京都西東京市）などで行われ、男子アイスホッケー部の選抜メンバーで臨んだ筑波大は、創部史上初の優勝を果たした。また、主将の佐藤昌哉（社学4年）が最優秀選手賞を獲得した。

予選リーグを2位で通過し上位リーグに進出した筑波大は、11月25日に一昨年優勝した駒澤大と対戦。2点差以上の勝利で優勝が決まる試合だったが、4－2で勝ち、優勝を決めた。

試合開始5分から9分の間、筑波大は反則が続き、一時退場者が続出。相手5人に対し、3人で守らなければいけない状況になったが、ピンチをしのいだ。

第2ピリオドでは、開始5分に駒澤大に先制点を決められた。しかしその後、筑波大は積極的な攻めを見せ、同9分、宮下亮一（社工1年）のパスを受けた堀部太希（医学5年）がゴール正面からシュートを決め、同点に。同11分には寺門翼（同5年）のゴールで2－1とリードして前半を終えた。

第3ピリオドでは、開始1分、峯直也（同4年）がゴール付近に立ち味方の放ったシュートにスティックで触れて方向を変える「ディフレクション」で点を決めた。さらに、同2分、佐藤が4点目となるゴール。その後、駒澤大に1点を返されたが、2点のリードを守り切り勝利した。

佐藤は自分たちを信じ、チーム全員が結束できたことが勝因。部員の9割以上が未経験者の筑波大でも勝つことができた。練習量の多さがついに報われた」と話した。（佐藤有里＝日本語・日本文化学類1年）

シュートを狙う佐藤（11 月 25 日、駒澤大戦で）＝男子アイスホッケー部提供

陸上

箱根駅伝

相馬 5区欠場

1月2、3日に東京箱根間往復大学駅伝競走（箱根駅伝）が行われた。筑波大からは相馬崇史（体専1年）が関東学生連合チームの5区で出走する予定だったが、右足首の故障で欠場。大城将軌（まさのり）選手（平成21年度リスク工学専攻修了）以来、11年ぶりの筑波大生の箱根駅伝出場という快挙とはならなかった。

相馬は箱根駅伝の約3週間前の練習中、右足首に違和感を覚えた。その後も練習を続けていたが、徐々に痛みは強まり、出走3日前に筑波大の弘山勉駅伝監督に故障を報告した。その後は治療に専念し、右足首に負荷のかからないよう調整を続けたが、走れる状態には至らず、出走を断念。出走2日前に関東学生連合チームに辞退を申告し、欠場となった。

相馬は「悔しい。今まで応援してくれた人たちの期待に応えられず、申し訳なかった」と話した。けがの状態と今後については、「箱根駅伝後、1週間休養をとったためそろそろ走れるようになる。今後の目標は関東学生対校選手権（関東インカレ）の10000メートル、5000メートルで上位に入ること。また、10月の箱根駅伝予選会にも備えたい」と語った。（森賀遼太）

広告欄

詳しくは 029-853-6699（本紙編集室）
または shinbun@un.tsukuba.ac.jp まで

天皇杯全日本選手権

堺ブレイザーズ破り8強

バレー

バレーボール日本一を決める天皇杯全日本選手権のファイナルラウンド第1週が、12月15―17日に東京体育館（東京都渋谷区）で開催され、筑波大男子は、2回戦でV・プレミアリーグの堺ブレイザーズに勝利し、ベスト8に進出した。準々決勝で同じくV・プレミアリーグのジェイテクトSTINGSに敗れたが、実業団チームを破り健闘した。（佐藤巧基）

力強くスパイクを打ち込む小池（12月16日、堺ブレイザーズ戦で）＝日本バレーボール協会提供

■堺ブレイザーズ戦

16日に行われた2回戦の相手は堺ブレイザーズ。筑波大はサーブレシーブで苦しみ、簡単なボールを上手く返球できなかった。田城広光（体専3年）らが奮闘したが、守備の乱れから2セットを連取されると、秋山央監督（体育系・助教）は、「下級生は頑張ってくれている」と4年生を鼓舞。主将の中根聡太（同4年）が一格上相手に気持ちで負けていたが目が覚めたと話したように、第3セット目からは秦耕介（同4年）ら4年生がサーブを正確に返球するなど、守備が安定した。その後は小池勇輝（同4年）の強烈なスパイクや、田城の速攻などが決まり始めた。これで流れをつかんだ筑波大は、残り3セットを連取し3―2で勝利した。

■ジェイテクトSTINGS戦

17日に行われた準々決勝の相手は、世界トップレベルの選手マティ・カジースキが所属する3ジェイテクトSTINGS。筑波大は、序盤からカジースキの強烈なスパイクとサーブに苦しめられた。カジースキのジャンプサーブで崩され、攻撃までつなげることができず、第1セットには9連続得点されるなど厳しい展開に。筑波大は小澤宙輝（同2年）の鋭いバックアタックなどで反撃したが、最後までカジースキを止められず0―3で敗北。ベスト8で天皇杯を終えた。

中根は「世界で活躍する選手（カジースキ）が本気で戦ってくれた。世界との壁を感じられたが、自分たちのバレーをすることができた」と話した。

ハンド

日本選手権

ハンドボール日本一を決める日本選手権が、12月19―24日に田辺中央体育館（京都府京田辺市）などで行われ、筑波大は2回戦で日本リーグの北陸電力に25―24で勝利。3回戦では豊田合成に敗れたが、格上の実業団チームに勝利する大金星となった。

19日の北陸電力戦では、前半、筑波大は先制を許したが、その後は互角の展開に持ち込み、中盤、牧野イサム（体専3年）の連続得点でリードを得た。一時退場者が続出した影響で同点に追いつかれたが、終了間際に得点を決め、12―13で前半を終えた。

後半開始直後、筑波大は再び一時退場者が続出し、数的不利の状況となった。しかし、ゴールキーパー坂井幹（同4年）の好セーブや、自陣ゴールから通常よりも前に出た組織的な守りで、相手に簡単には得点を許さなかった。その後は徳田新之介（同4年）と牧野を中心に攻め、20分には6点差をつけた。しかし、北陸電力に徐々に追い上げられ、同点に持ち込まれる。一進一退の攻防が続く中、試合終了20秒前に平本東介（同3年）が決勝点を挙げ、25―24で劇的な勝利を果たした。

徳田は、「格上のチームとの試合だったが、入学した時から日本リーグのチームを倒すことを目標としていたのでうれしい」と話した。

この試合を最後に退任するネメシュ・ローランドコーチ（体育系・助教）は、「北陸電力は学生には負けられないという重圧の中でプレーしていたが、筑波大は純粋にハンドボールを楽しみながら戦えた」と話した。（豊岡恵＝比較文化学類1年）

格上相手に大金星

体操

全日本ラート競技選手権

松浦準優勝

第23回全日本ラート競技選手権が12月9―10日につくばカピオ（つくば市竹園）で行われた。男子総合では髙橋靖彦（平成24年度体育専攻修了）が、女子総合では堀口文（平成28年度体育専攻修了）がそれぞれ優勝した。松浦佑希（体科後期1年）は斜転、跳躍を1位で通過したが、最終種目の直転で惜しくも3位となり、女子総合で2位となった。また、今大会の結果により、筑波大から松浦ら3人が日本代表に選出された。

松浦は、「2位は悔しいが、今の自分の実力。6月の世界大会では上位になれるよう練習を積みたい」と話した。（鈴木瑞穂）

2連覇ならずベスト8

全日本大学選手権

サッカー

大学サッカー日本一を決める第66回全日本大学選手権（インカレ）が12月13―24日に柏の葉公園総合競技場（千葉県柏市）などで行われた。筑波大は準々決勝、東京国際大に0―1で敗れ、2連覇を逃した。（飯田健介＝社会学類1年）

敵陣に切り込む戸嶋（12月18日、東京国際大戦で）＝（一財）全日本大学サッカー連盟提供

インカレ初出場ながら2連勝と勢いに乗っていた東京国際大と対戦した。

試合は開始早々から括抗した展開となったが、前半5分、筑波大は東京国際大に右サイド突破からファールを誘われ、PKを与えてしまい、これを決められて先制を許した。筑波大は北川らが中心となり同点を狙ったが、ポストやバーに嫌われゴールを決めることはできず、前半終了。

筑波大は後半開始とともに、準決勝・決勝に向けて温存していたエースの中野誠也（同4年）を投入。中野が起点となり何度もチャンスを作ったが、簡単にはゴールを奪えなかった。試合終了間際には、野口航（同4年）のロングボールからこの試合最大のチャンスを演出。これを受けた中野のシュートはネットを揺らしたが、オフサイドの判定となった。最大のチャンスを逃した筑波大は、このまま同点に追いつくことができず試合終了。0―1で準々決勝敗退が決まり、2連覇とはならなかった。

中野は「このメンバーで優勝したい思いが強かったが、悔しい。4年間でさまざまな経験ができて、筑波大に感謝している」と話した。

小井土正亮監督（体育系・助教）は、「今シーズンは先制されても逆転する試合が何試合もあっただけに、非常に悔しい試合になった。4年生の選手たちから、残り2試合できる機会を奪ってしまい申し訳ない。筑波大をこのレベルにまで上げてくれて感謝している」と振り返った。

中野ら4選手 Jリーグ内定

Jリーグクラブに入団が内定した蹴球部4選手の合同記者会見が、12月25日に本部棟で行われた。入団が内定したのは、中野誠也（体専4年）＝J1ジュビロ磐田、北川格斗（同4年）＝J2モンテディオ山形、戸嶋祥郎（同4年）＝J2アルビレックス新潟、野口航（同4年）＝J3ギラヴァンツ北九州の4選手。

小井土正亮監督（体育系・助教）は「名門・筑波大を復活させてくれた。プロでの活躍を期待している」と4選手を激励した。

蹴球部からはほかに、浅岡大貴（同4年）がアルビレックス新潟シンガポールに内定している。（飯田健介、12面に関連写真）

顔

泳ぎと向き合い飛躍

インカレ100㍍バタフライ準優勝

平田茉穂（体専2年）

昨年9月に行われた日本学生選手権（インカレ）、女子100㍍バタフライで59秒29のタイムで準優勝を果たした。「思い切りの良いスタートと終始安定した泳ぎが持ち味で、同種目で優勝したエース・平山友真奈（体専4年）に続く存在と期待される。

岡山県出身。泳ぎは苦労した両親の勧めで、3歳から水泳教室に通い始めた。小学5年の時、初めて全国大会に出場。中学3年では、全国中学生体育大会の400㍍自由形で決勝に進出するなど頭角を現した。

高校進学後は泳ぎの幅を広げ、高校2年の冬には自由形、バタフライ、個人メドレーの7種目で日本選手権の標準記録を突破した。しかし、3年になると体形の変化で今までの泳ぎができなくなった。優勝を目指した最後のジュニアオリンピックは、200㍍自由形2位に終わった。13年間指導を受けたコーチから「最後の年に結果を出してあげられず申し訳ない」と言われたことが辛かったと振り返る。

その後、日本有数のプール設備を誇り、全国上位の選手が多くいる筑波大に入学。「大学で成長して故郷のコーチに誇ってもらいたい」と意気込んだ。しかし、入学後は自己ベストを更新できない日々が続いた。専門種目を200㍍自由形から100㍍バタフライに変えたが、成績は振るわないままだった。更に、慣れない環境での一人暮らしが精神面に追い打ちをかけた。練習にも身が入らず、「今までで一番辛い時期だった」。

不調を救ったのは、マネージャーの三田村健司さん（物理3年）だった。昨年1月、三田村さんに「自分がどういうレースをしたいか分かっていないのではないか。他の選手は理想のレース展開を考えている」と助言を受けた。この言葉をきっかけに、自分の泳ぎと真剣に向き合った。自分の泳ぎの映像を何度も確認し、100㍍を一定のペースで泳ぎ切ることを目指した。練習では「できることはすべてやろう」とより積極的な姿勢となった。

成果はすぐに現れた。1カ月後の茨城県短水路選手権で自己ベストを更新。「やればできる」という自信につながった。

そして、昨年9月のインカレの女子100㍍バタフライで予選・決勝ともに自己ベストを更新し準優勝。1位の亜出ひ・42秒及ばなかったが、大学で初めて全国大会の表彰台に立った。

レース後には、三田村さんと涙して喜んだ。故郷のコーチからも「誇りの弟子」との言葉をもらった。「周りの人に恵まれて立ち直ることができた」とほほえむ。

今後の目標は4月の日本選手権での決勝進出だ。また、9月のインカレでの優勝も目指す。着々と自己ベストを更新しているが、仙石泰雄監督（体育系・助教）は「まだ泳ぎは荒削り。伸びしろはいくらでもある」と期待を寄せる。

大学入学時は全く結果が出なかった。しかし、自分の泳ぎと向き合うことで全国トップレベルの選手に成長した。今後の成長も未知数だけに、目が離せない。（池田花於里＝比較文化学類1年、写真・明石尚之＝体育専門学群2年）

学生宿舎 改善進む

初の給湯器導入

筑波大学は平砂、追越、一の矢、春日の各学生宿舎に、入居者の要望が高かった給湯器の設置を始めた。一方、全学生宿舎で無料利用できるインターネット（有線・無線）の通信速度が9月中旬から低下している問題では、速度改善のためネットの回線業者を変更する見込みだ。すでに1月10日から平砂9号棟で試験的に回線を変更したが、本紙の調査では変更後の通信速度は約4倍になった。（木村誠、越智小夏）

補食室に設置された給湯器（1月13日、一の矢学生宿舎で）＝木村誠撮影

給湯器設置

給湯器設置は1月9日に開始。一の矢宿舎から棟ごとに順次行い、2月26日には用途廃止棟を除く給湯器が未設置の宿舎で設置が完了する予定だ。ガス台やシンクがある各棟の補食室に設置され、入居者が自由に利用できる。設置費用の総額は約3千万円で、入居者の宿舎費から捻出。運用費は大学側が負担する。

学生生活課の担当者は「入居者の要望が高く設置を決めた。目に見える形での取り組みができてよかった」と話した。一方、ある入居者は「冬場は水が冷たく、炊事や皿洗いが大変だった。給湯器の設置は本当に助かる」と話していた。

学生宿舎にはこれまで、シャワー室以外にお湯が出る設備がなく、居室内の洗面台は水しか出なかった。

宿舎ネット改善

筑波大の全学生宿舎のネットを管理する業者によると、新たに変更する予定の回線業者は、一度により多くのデータを送信できる回線を持つ。本紙がこの回線を試験的に導入した平砂9号棟で調べたところ、導入後（13日21時）の通信速度は、導入前（9日21時）に比べ約4倍向上。また、筑波大のウェブページの表示にかかる時間も、30秒が5秒程度になっていた。

平砂9号棟に住む男子学生は「これまではネットが遅すぎて、レポート提出が困難な時もあった。改善後は非常に使いやすく、とても助かる」と話していた。

ネットの管理業者は今後も通信速度を調査し、速度向上が確実になり次第、順次全ての学生宿舎で回線変更を進める。

記者の目

更なる改善を

今回の給湯器の設置は、入居者からの要望を受けたものだという。ますます、設置を歓迎したい。

記者は一年生の頃、平砂宿舎に入居していた。当時は、シャワー室以外にお湯が出る設備がなく、朝は私物の電気ケトルでお湯を沸かし、洗面台にポリバケツを置き、水と混ぜ合わせて洗面用のぬるま湯を作っていた。ほかの入居者も多くが同じことをしていた。

今後、後輩がそうした苦労をしなくて済むのはうれしい。ただ東京ガスによると、給湯器が日本に普及し始めたのは1965年ごろ。設置時期の遅さは否めないだろう。

また宿舎では現在もエアコンが整備されておらず、例年不満の声が多く挙がる。

時代に沿って、生活の水準は変わる。今回の給湯器導入とネット改善に続き、学生が安心して快適に暮らせるよう、更なる改善を求めたい。（越智小夏）

ニューイヤーパーティ初開催

留学生ら日本の正月体験

日本人学生と留学生の交流を目的にした、Global Village New Year Party 2018が11日、グローバルヴィレッジ内の大和リースコミュニティステーションで開かれ、参加者は餅つきなど日本の正月を楽しんだ。

パーティは同宿舎の日本人学生らの要望をもとに、学生生活課と同宿舎管理事務所が主催。同宿舎などに入居する留学生と日本人学生の合わせて約140名が参加した。

交流を楽しむ参加者ら（1月11日、グローバルヴィレッジで）＝木村誠撮影

正月飾りが施された会場では、留学生に配慮したハラール食がバイキング形式で提供される中、まず和太鼓サークルの「筑波大学ときめき太鼓塾」が太鼓演奏を披露。永田恭介学長があいさつを行った後、餅つきが行われ、留学生らが掛け声に合わせて餅をついた。紙製の手裏剣を用いた的あてゲームも行われ、会場は大いに盛り上がった。

また、同宿舎に入居する高瀬勇気さん（物理2年）はポールやヨーヨーを用いた大道芸を披露。会場からは歓声が上がった。高瀬さんは「演技が成功してよかった。会場の皆さんと一緒に盛り上がることができて楽しかった」と話した。

参加した中国人留学生は「料理もおいしく、交流もできてとても楽しかった。新しい友達もできたので、来年もぜひ参加したい」と話す一方で、ある日本人学生は「留学生とたくさん交流できたが、もっと英語を勉強したいと感じた」と話していた。

主催した学生生活課は「今回は大学側が主催したが、今後は学生がイベントを自発的に企画してほしい。今回はその足がかりになったと思う」と話している。（木村誠、越智小夏、12面に関連写真）

学生優秀団体で表彰

中学生への放課後指導など

優秀な団体を決めるコンテスト「第3回学生団体総選挙」が12月9日にペルサール新宿セントラルパーク（東京都新宿区）で開かれ、筑波大学のサークル「Free Education」が、キャリア・教育・医療部門の準グランプリに輝いた。同サークルは、放課後に地元の中学生に勉強を教えるサークル。

同イベントは、全国の学生団体をビジネスなど8部門に分類。活動内容などをプレゼンテーションし、各部門のグランプリを決めたうえで、その中から総合グランプリを決める。総合グランプリには100万円、部門ごとのグランプリには20万円、準グランプリには5万円の副賞が送られ、同イベントの協賛企業からの支援が得られる。

同サークルは、創立して10年。経済的理由から塾に行けない子どもたちに教育の場を与えるため、地元の中学生に勉強を教えるほか、高校生に大学の授業の紹介や受験説明会を行なっている。

代表の毛塚航大さん（比文2年）は「活動や理念が認められてうれしい。今後もこの結果をバネに活動したい」と話した。（越智小夏）

お笑いイベント開催

コントや漫才など披露

筑波大学生が主催するお笑いイベントの「Tーグランプリ」が12月16日、つくば市立中央図書館内のアルスホール（つくば市吾妻）で行われた。4回目となる今回は、過去最多の7組が出場。漫才やコントなどのネタを披露し、学内外から来場した約70人の会場を大いに沸かせた。

優勝者は来場者の投票によって選ばれるが、接戦の末、兼子健太さん（社学4年）と三代侑平さん（生物4年）の「高橋よしおwith高橋かずお」が王座に輝いた。二人の題材は墓地。三代さんがギターを演奏し数曲を替え歌にして歌い、兼子さんがそれに合いの手を入れる軽快なツッコミで、会場は笑いの渦に包まれた。

2人は中学生の頃からコンビを組み、学校の文化祭などでネタを披露。2人は「ネタの最中は相方の声しか聞こえないほど集中していた。ネタができたのが昨日で不安だったが、以前、失敗した時の反省を生かせた。思いがけず優勝できてうれしい」と喜びを語った。

会場では「ツクバオオギリグランプリ」も開催され、15人が参加。今年度の

大喜利を楽しむ参加者ら（12月16日、つくば市立中央図書館で）

留学生の目　マレーシア

ニク・ヌル・ナタリア

文化に「正解」はない

マレーシア出身の私が、マレーシアに詳しくない人たちに文化を話すときに嘘をついたとしても信じる人はいるでしょう。その人が事実確認をしないで他者に伝えると、誤った情報が広まってしまいます。この一連の流れは大変危険です。

現在、世の中ではこの流れが多く、とても恐ろしい世界だと思います。

それでは一体、文化についてどのような事実確認をすれば正確な情報が得られるのでしょうか。実は、文化には「正解」なんかが存在していません。文化は体験して理解し、納得するものです。異文化を知り、納得するためには、その文化の中で生活しなければなりません。

私は来日する前、マレーシアの日本語学校で1年8カ月の間、日本語や日本文化について学びました。しかし、そこだけでは日本の慣習や観点を完全に理解できず、日本で暮らしてみてやっとそれらについて理解することができました。

例えば、このような出来事がありました。私の日本語学校の授業は留学向けの集中コースで時間的な余裕がなかったため、ちゃんとした休みが取れませんでした。そのため、何人かの学生は授業中居眠りをして、先生によく注意されていました。日本語学校の先生方は全員日本人で、日本の大学でも同様な考え方なのだろうと思いました。

しかし来日し、大学の授業を受けていると、授業中居眠りをする学生は意外と多いことはもちろん、それよりも教授に注意されることを目にしたことが一切ないことに衝撃が走りました。非常に興味深いところですが、教授などには聞きづらいと思うため、単に疑問として自分の中に思い続けました。

大学3年生になった最近、ある先生の話を聞いて、ようやくそれに対する答えが見つかりました。その先生は「授業中居眠りをする学生がいることは、授業スタイルに問題がある。問題は学生が居眠りすることでなく、学生に眠りをさせる授業をする教員だ。授業の計画を改善すべきだ」とおっしゃいました。その答えに私は感動しました。異文化とは正に事柄を見る立場に関連することが分かりました。

一般的に人が知識や技術などを習得する際、何度も繰り返すことでやっと習得できます。異文化を理解する時も同じで、実際に暮らしてみないと把握しづらいです。しかし、生まれ育った文化が染みついているので、異文化を本当の意味で納得することはできないかもしれません。だからと言って異文化を否定してはいけないと思います。

人の価値観は多様で、世の中はさまざまな文化で彩られています。全てを統一する必要はありません。私の望みは、一人ひとりの個性を失わずに世の中が成り立っていくことです。（比較文化学類3年、原文も日本語）

現場の通行禁止は解除

屋根の崩落 割れたガラス 潰れた椅子

【1面続き】粉々に割れた窓ガラス、潰れた椅子……。13㌧もの屋根が崩落した現場には、事故の生々しい爪痕が残っていた。12月10日午前7時45分ごろに起きた第一エリアの1B棟と1C棟の2階をつなぐ渡り廊下の屋根の崩落。ある教員は、犠牲者が出なかったのは不幸中の幸い」と嘆息した。事故の状況を報告する。（木村誠、秋田耕平）

屋根の崩落で飛散したガラスや建具（12月10日、1C棟で）＝木村誠撮影

施設はいま

同日午後3時ごろ、日頃から見ている短文投稿サイト「ツイッター」上に、ある筑波大生が写真付きで崩壊を伝える投稿を発見した。早速現場に走ると、1C棟側の屋根を支えていた数本の固定器具（アンカーボルト）が断ち切れ、屋根が崩落していた。

二次災害を危惧し、現場には可能な限り近付かないようにしたが、それでも1C棟側から渡り廊下の出入り口付近を見ると、屋根や扉のガラスが粉々に割れ、辺りに飛散していた。また、崩落した屋根は渡り廊下へ出る扉に直撃。扉の金属製の枠は壊れ、落下していた。廊下にあった鉄製の机と椅子は潰れ、渡り廊下についていた手すり（長さ約25㍍、直径約5㌢）が約2㍍にわたって折れ曲がっているのも見えた。

更に、反対側の1B棟側で屋根を支えていたアンカーボルト数本も断ち切れ、屋根の鉄骨が傾いていた。

崩落翌日、第一発見者の警備員の男性に話を聞くことができた。警備員は崩落時、1C棟の警備員室にいたが、「大きい音だったが車の衝突音などではなく、何か非常に重いものが落ちたような音を聞いた」と話す。ただ、振動などは感じなかったという。警備員は「毎日何度も巡回しているが、屋根の異常はなかったと思う。8年間勤務しているが、こんなことは初めてだ」と語った。

また同日、同廊下をよく使うという学生に聞いたところ、「（同廊下は）毎日何度も通行する。渡っている時に崩落してきたらと思うと今でもゾッとする。死者が発生してもおかしくない」と話す。

◆

崩落した屋根は12月19日に撤去が完了し、20日に通行禁止が解除された翌日、現場を訪れると、以前設置されていた机や椅子の一部は撤去され、屋根と建物を接合していた部分は木板で覆われていた。

ある学生は「授業移動で毎日必ず使うため、（崩落して屋根がなくなり）雨の日などはとても不便。早急に屋根を再設置してほしいと話す。別の学生は「再び屋根を設置してほしいとは思うが、また崩落するのではないかとも思い心配だ。また、ほかの建物などの強度は大丈夫なのか不安だ」と語る。

1B棟と1C棟は主に人文学類や社会学類などが講義や演習で使用している。大倉浩人文学類長（人社系・教授）は「13㌧もの屋根の崩落に驚いている。人的な被害がなかったことは正に不幸中の幸いで、本当に良かった。以前屋根の雨漏りの修繕を行ったが、その際に気づかなかったのだろうか」と話していた。

ビブリオバトル

北原さん ベスト6

「夜の国のクーパー」紹介で

本の紹介をし合い、聴衆が最も読みたいと思った本を決める「全国大学ビブリオバトル2017 首都決戦」（主催＝活字文化推進会議）が、12月17日によみうり大手町ホール（東京都千代田区）で開かれ、筑波大学の北原光梨さん（知識図書1年）がベスト6に輝いた。

ビブリオバトルは、出場者が好きな本を1冊持ち寄り、その本について5分間紹介。その後、質疑応答を行い、聴衆全員の投票で、最も読みたくなった本「チャンプ本」を決定する。首都決戦では、全国1160人の出場者の中から予選会、地区決戦を勝ち上がった36人がそれぞれの愛読書について熱弁をふるった。

北原さんは、昨年10月17日に筑波大附属中央図書館で行われた大学予選会（筑波大学会場）、翌月5日に茨城県立図書館（水戸市）で開かれた茨城決戦大会を勝ち上がり、首都決戦に出場。全大会で伊坂幸太郎の「夜の国のクーパー」を紹介した。

「夜の国のクーパー」は敗戦直後の国で起こる出来事を、猫の視点から描いたおとぎ話のような一冊。北原さんはあえて作品のあらすじには触れず、「夜の国とはどんな国なのか」「クーパーとはいったい何者か」などと問いかけることで、聴衆を引きつけた。また通称「伊坂節」と呼ばれるテンポの良い会話の流れなどについて説明し、本や著者の魅力を存分に語った。

北原さんは「本番では緊張し、思うような発表ができず悔いの残る結果だった。だが、本を通じ人と関われるビブリオバトルの魅力に夢中になった。（今後は）新しい分野の本にも挑戦したい」と語った。（竹添そら＝知識情報・図書館学類1年、写真も）

「夜の国のクーパー」を紹介する北原さん（12月17日、よみうり大手町ホールで）

tanbō

けものの会つくば

動物と人間の関わり考える

筑波大学から車で北に10分の宝篋山。紅葉を見に訪れた観光客を横目に、地面に目を凝らしてやってきた。

記者も12月、宝篋山でのフィールドワークに加わった。周囲に目を凝らしながら里山を散策。何も知らなければ見過ごすような、「けものの跡」を会員たちは次々に見つける。道端のあぜが柔らかくなっているのを発見すると、「これは、イノシシが餌を求めて掘り返した跡ですね」と代表の神宮翔真さん（生環後期1年）が解説した。

更に歩くと、草むらの中から使用済みの薬莢を見つけた。メンバーの小川結衣さん（同前期2年）は「宝篋山のふもとでは、猟銃を使用した鳥類の駆除が行われている」と話す。

昨年の夏には、筑波山のふもとから5カ所に赤外線に反応するカメラを設置。2207回の撮影を行った。そのうち530回で野生動物を確認。映像にはイノシシが最も多く映っており、授乳の様子も撮影した。

イノシシのほか、ノウサギやタヌキ、アナグマなども確認。行動を分析し、子育てのために多くのえさが必要なイノシシや、ノウサギなどの特定種だけが、人里まで下りてくる可能性が高いことを発見した。これらの情報をもとに、野生動物の行動パターンや目撃情報を地図にまとめてもいる。

神宮さんによると、食料を求めて山から人間の暮らす場所へと下りてくる野生動物は年々増えている。茨城県によると、平成27年度の野生鳥獣による農作物の被害総額は約5億5000万円で、ほとんどがイノシシによる被害。また車との衝突事故も多い。「筑波大の近くでも、野生動物を巡って多くの問題が起きている。他人事ではないと知ってほしい」と神宮さんは話す。

学園都市として整備が進む一方、筑波山や宝篋山など、豊かな自然も同居するつくば。野生動物と人間の関係について、会員たちはこれからも考え続ける。（豊岡恵＝比較文化学類1年、写真も）

イノシシが餌を求めて掘り返した跡を指差す会員ら（12月23日、宝篋山のふもとで）

サッカーで社会貢献考える

イベントに339人が参加

サッカーを通して社会貢献を考えるイベント「第14回チャリティーフットサル大会」が12月9日に筑波学院大学サッカーフィールド（つくば市吾妻）で開催された。イベントには339人が参加。サッカー大会のほかに、目隠しをして鈴の入ったボールの音を頼りに行うブラインドサッカーの体験などが行われ、会場は大いに盛り上がった。

同イベントは、筑波大学の学生団体「WorldFut TSUKUBA」が毎年主催。サッカーと社会貢献を結びつけたうえで、参加費や協賛企業の支援を元に、カンボジアで小学校やサッカーグラウンドの建設などをしている。同イベントの協賛企業は過去最多の43社が集まった。

大会はリーグ戦で順位を決めた後、順位ごとにトーナメント戦を行い、優勝チームを決めた。決勝戦では選手紹介や実況が行われ、参加者全員が応援する中での試合となった。

サッカーを楽しむ参加者ら（12月9日、筑波学院大学で）

参加者らは終始笑顔で、「楽しかった」「また参加したい」と口々に話した。（明石尚之、写真も）

昼休みには、ダブルタッチサークル「pure plume」やアイドル研究会の「爆走☆ペデストリアン」など、筑波大のサークル団体がステージで会場を盛り上げた。試合後、カンボジアでの活動のビデオを流し、社会貢献に関心を持ってもらう取り組みもあった。

同団体の代表の真田佳奈さん（国総3年）は「参加者が楽しそうにサッカーをしている姿が印象的だった。この光景のようにカンボジアの子供達が思いっきりサッカーを楽しんでいる姿を見たい」と語った。

Who's Who?

自由民主党茨城県連で初の学生部長を務める

上野 由佳 さん（社学3年）

「将来は愛媛で政治家になりたい」と話す上野さん（12月26日、中央図書館で）

自由民主党茨城県支部連合会（水戸市）の青年局学生部を昨年6月に発足させ、その初代部長を務める。同学生部の部員は7人。主な活動は、街頭演説での候補者の紹介や勉強会の開催、定例会での活動報告などだ。

愛媛県出身。幼いころから豊かな自然に囲まれて育った。新聞やニュースを見るのが好きだったことから、政治に興味を持ち、地元の環境や人々の生活を守りたいと、政治家を目指すようになった。

大学入学後も思いは変わらず、1年の時に議員インターンシップに参加。その時知り合った市議会議員が話してくれた、茨城県常総市での豪雨災害（2015年9月）の時の議員たちの対応が印象に残った。市内を流れる鬼怒川の堤防が決壊し甚大な被害が出る中、茨城県出身の自民党国会議員や県議、市議らが政府に災害支援や住宅の半壊に対する補助金の拠出を働きかけ、政治が被災者を救ったと聞いた。「政治の力は人々を救えることを知った」と当時を振り返る。

学生部を発足させたきっかけもインターンで知り合った自民党市議からその立ち上げを誘われたことだった。議員と行動を共にし、より深く政治の世界を勉強したいと思っていたことに加え、豪雨災害での自民党議員の働きも脳裏をよぎった。「自民党であれば故郷を守ることができる」と考え、発足に携わることを決めた。

学生部が発足して間もなく、昨年8月に茨城県知事選挙と県議会議員補欠選挙が行われた。できることは何でもしようと思い、朝早くから夜遅くまで選挙関連の書類作成や演説会の司会、ビラ配りなど、ほぼ毎日選挙事務所に出入りした。「どんなに仕事が立て込んでいても、忙しいと思ったことはない。むしろ楽しかった」と話す。

選挙事務所では作業の合間に多くの地元の年配の支援者と茨城県や政治などについて気兼ねなく話した。

「茨城について何も分からないまま突っ込んでいった。だからこそ多くの茨城の魅力を教えてもらえた。本当に充実した体験だった」

特に印象に残ったのは選挙に対する、学生と地域の支援者の考え方の違いだった。多くの学生は候補者の公約内容などを比べて投票する場合が多いが、地域の支援者らは「知り合いだから」「地域の祭りに来てくれたから」「直に話してみて人柄がよかったから」などと、「つながり」を理由に投票していた。

「大学では学べない現場の様子が興味深かった。また、地域住民と直接やり取りを繰り返す重要性をとても感じた」

昨年10月の衆院選では、茨城県の候補者に愛媛県の候補者を紹介してもらい、故郷でその選挙応援を行った。「その地域で有力な議員だったこともあり、事務所に出入りする人数が圧倒的に多かった。大規模な商店街や島しょ部などの地理的な環境もあり、島を一周しながらの演説や約500㍍の商店街を練り歩くなど、これまでと違う経験だった」

今後の目標は「全国統一です」と冗談めかして話す。

現在、自民党学生部は都道府県連ごとに23の組織があるが、組織の全国化には至っていない。「全国に数百人いる自民党学生部員の声を国政に反映させるべく、茨城県連学生部がその活動の先頭に立って働きかけをしたい」と目を輝かせた。

（森賀遼太＝社会学類1年、写真も）

政治の力は人々を救える
「学生の声を国政に届けたい」

編集後記

12月、本紙の編集室にうれしい知らせが入りました。「第7回大学新聞コンテストの一般新聞部門で、本紙のキャンペーン「宿舎を問う」が連載を受賞したとです。2015年4月から始まったこの連載は、地道な報道の末、粗大ゴミの不法投棄問題でゴミ置き場の設置という成果をもたらしました。4年目に突入する今年も報じ続けます▼第一エリアの渡り廊下の屋根の崩落で本紙はウェブで速報を配信しました。今号でも大きく報じています（1、3、4、11面）。新規連載「施設はいま」では、施設の現状や問題点などを多角的に報じ続けていきます▼3年生が引退し、1、2年生が主体の編集部になりました。前編集長は前号の編集後記で「報じ続ける姿勢」を説きました。やっと完成した今号は、先輩諸氏が築き上げてきた貴重な識見に基づいたものです。先輩たちが残した「報じ続ける姿勢」を受け継ぎ、貫いていきます。（編集長・秋田耕平＝社会学類2年）

次号は **4月6日（金）** 発行予定です

学内総合

大学入試センター試験

センター試験に挑む受験生たち（1月13日、2H棟で）＝中村瑞歩撮影

2面へ

学芸

構成特別演習作品展

美しい空間を作る髙松さんの作品（12月19日、総合交流会館で）＝秋田耕平撮影

5面へ

スポーツ

蹴球部Jリーグ入団会見

入団会見で笑顔を見せる選手たち（12月25日、本部棟で）＝明石尚之撮影

9面へ

学生生活

ニューイヤーパーティー

餅つきに興じる留学生（1月11日、グローバルヴィレッジで）＝木村誠撮影

10面へ